JATET JOURNAL

Vol.24



特集

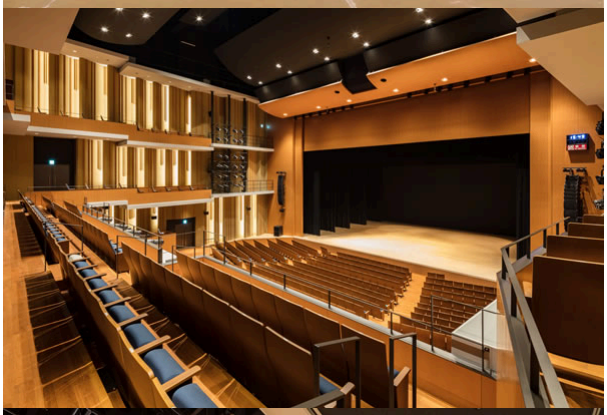
平塚文化芸術ホール

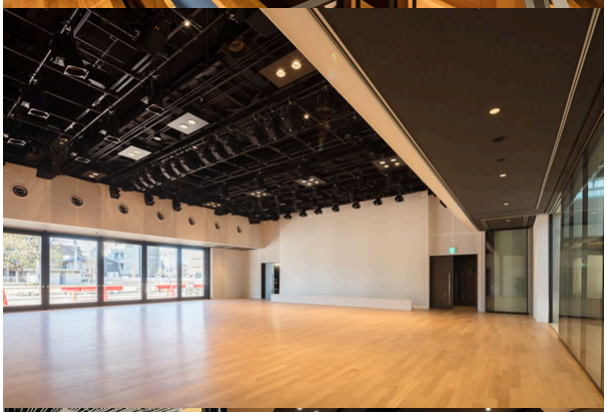
Vol.24 平塚文化芸術ホール

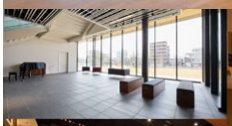
1. 平塚文化芸術ホールの供用について
   平塚文化芸術ホール・見附台公園　指定管理者　ひらつか文化パートナーズ
   総括管理責任者　小林宏年（株式会社神奈川共立）
2. 平塚文化芸術ホールの設計・施工のプロセス「軽やかさやカジュアルさ」を目指して
   株式会社シアターワークショップ　小林 徹也
3. まちづくりの新たな拠点としての平塚文化芸術ホール
   清水建設・安井建築設計　設計共同企業体
   清水建設株式会社　内矢 雅清
   株式会社安井建築設計事務所　楠木 賢一／古賀 愛乃
4. ひらしん平塚文化芸術ホールの舞台機構設備
   三精テクノロジーズ株式会社
   舞台機構事業本部　設計部　和田 美香
   制御設計本部　第一設計部　三上 大介
5. 平塚文化芸術ホール 舞台照明設備
   丸茂電機株式会社 菅野 誠義
6. ひらしん平塚文化芸術ホール　舞台音響映像設備
   ヒビノスペーステック株式会社 システム事業本部 開発部
   竹部 健太

（2026年9月公開）













平塚文化芸術ホールの供用について

平塚文化芸術ホール・見附台公園　指定管理者　ひらつか文化パートナーズ
総括管理責任者　小林宏年（株式会社神奈川共立）

はじめに

このたびは、JATETさまよりお声がけをいただき、平塚文化芸術ホールの施設概要についてご説明する機会を頂戴いたしました。

本稿では、ホールおよび隣接する見附台公園、さらには見附台地区全体がどのような経緯で整備され、現在のかたちに至ったのか、その背景とプロセスについてご紹介いたします。あわせて、運営事業者の立場から見えてきた考え方や気づきについても触れていきます。

なお本稿では、施設に来訪する方を「来館者」、諸室等の貸館利用を行う方を「利用者」、公演鑑賞を目的とする方を「観客」と表記しています。

平塚文化芸術ホールは、令和4年3月に供用を開始しました。

私は、平塚文化芸術ホールの館長を務めております小林と申します。職名は「総括管理責任者」としております。

これは、本施設に隣接する都市公園である見附台公園についても、私どもが指定管理者を務めており、公園の管理責任者とホール館長を兼ねているためです。現職に就く前は、他市でも館長職や舞台責任者を務めてまいりました。

平塚文化芸術ホールの概要

平塚文化芸術ホールは同地にあった平塚市民センターの建て替えとして整備されました。

1200席の大ホール、最大200名収容の多目的ホール、大会議室、小会議室、大練習室、小練習室、和室、文化芸術支援室、各楽屋などが設置されています。また敷地と隣接して西側に見附台公園があります。東海道線平塚駅からは徒歩7分程度で、中心市街地からもおよそ徒歩10分程度の場所にあります。

見附台周辺地区整備運営事業の位置づけ

本事業は、文化施設単体の整備にとどまらず「見附台周辺地区整備運営事業」として、周辺地域を含めた一体的な整備を行いました。

大規模小売店、飲食店舗、カフェ機能を備えたコンビニエンスストア、駐輪場などの便益施設、見附台公園、そして文化施設を、一つのコンソーシアムでまとめて整備しています。

そのため、文化施設単体での効果を考えるのではなく、地域として成果を出し、地域の価値を高めることを念頭に、提案および準備、施設運営に取り組んできました。

にぎわい創出と文化施設の役割

見附台周辺地区整備運営事業において、平塚市が求めるテーマの一つが「賑わい創出」です。平塚はもともと宿場町として栄え、商業が盛んな地域でしたが、近年はネットショッピングの普及や大規模ショッピングモールの出店、少子高齢化などにより、商店街を含めた地域の賑わいは以前ほどではありません。一方で、駅前中心市街地と見附台地区を結ぶ商店街には、現在も多くの店舗が立ち並び、一定の買い物・食事ニーズが存在しています。

見附台地区の価値を高め、駅前中心市街地を線で結び、回遊性を高めることが「にぎわい創出」の目的の一つです。

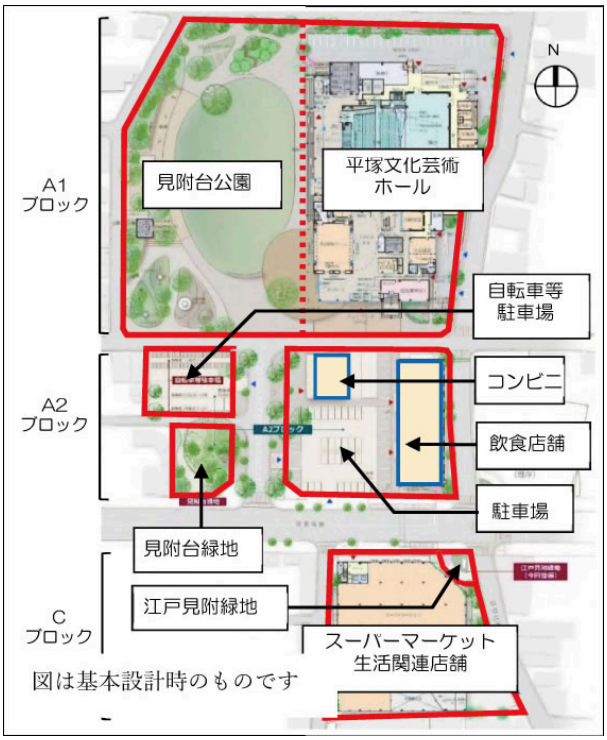
その拠点の一つとして、平塚文化芸術ホールを「行くと、いつも何かをやっている場所」と位置づけ、ソフト面ではこのコンセプトをもとに整備を進めました。

エントランスギャラリーでの展示、無料で利用できるフリーデスクの設置、アート分野の雑誌を閲覧できる情報コーナー、市のシティセールス展示などを通じ、来館者にとってのサードプレイスを提供し、共生社会の実現を意識した施設としています。

乳児から幼児を中心としたファミリー層にはキッズルームや公園の砂場・遊具を、小中学生には7,000㎡を超える公園・芝生広場を、高校生や大学生には館内各所に配置したフリーデスクを用意するなど、年齢層に応じた居場所づくりを意識しています。

また、廊下が一直線に延びる構成ではなく、曲がりながら諸室にたどり着く動線や、ガラス張りの会議室・練習室など、「中で何かが行われている様子が見える」つくりとしました。

これは、活動の様子を目にした来館者が芸術文化に関心を持ち、その裾野が広がることを期待したものです。



DBO方式による整備とコンソーシアム体制

本事業はDBO方式によって整備されました。

従来は施設完成後に運営事業者へ引き渡されるケースが多い中、設計段階から運営事業者として参画できたことは、効果的・効率的な施設運営につながったと実感しています。

応募にあたっては、大和情報サービス株式会社（現・大和ハウスリアルティマネジメント株式会社）を代表企業とし、清水建設株式会社、株式会社安井建築設計事務所、湘南造園株式会社、株式会社エス・ケイ・ディ、株式会社神奈川共立、日本管財株式会社、株式会社シアターワークショップの8社でコンソーシアムを組成し、見附台周辺地区整備・管理運営事業（A・Cブロック）に取り組みました。

公募は平成30年7月、優先交渉権者の決定は同年11月、指定管理者基本協定は平成31年1月に締結されています。

20年という長期指定期間に対して、公募開始から選定・協定締結までのプロセスは、非常にスピード感のあるものでした。

開館準備期間前の考え方の共有

協定締結後、要求水準書に定められた開館準備期間の前に基本設計期間があり、この期間を利用し、平塚市担当課と定期的に意見交換の場を設けました。

この意見交換の場は具体的な成果物を前提とせず、「どのようなホールを目指すのか」「平塚市として何を重視しているのか」といった根本的な考えを理解しあう場として非常に有効でした。担当者同士の信頼関係も構築できたかと思っています。開館準備業務が始まる前にこういった価値観を共有できたことは、結果的に組織同士の信頼関係構築にもつながり、その後のさまざまな判断が必要な機会において、大きな拠り所となっています。

また、自治体によっては文化振興を市長部局ではなく教育委員会がグリップしている場合もあります。平塚市の文化振興に関する考え方もこの時期に学ぶことが出来ました。

コロナ禍での開館準備

平成から令和へと時代が移り変わる中、社会は新型コロナウイルスの蔓延という、これまでにない大きな変化を迎えます。

このため当初想定していた準備期間中の市民参加型ワークショップなどは中止せざるを得ませんでしたが、令和3年度中の供用開始という期限は、平塚市の重要な施策でもあり、変更することはできませんでした。

感染拡大が本格化すると、マスク着用の徹底や、対面での打ち合わせを避け、可能な限りリモート会議を行うという社会環境へと変化していきました。

しかし、自治体との打ち合わせについては、すべてをリモートで完結させることは難しい状況でした。

報告会であればリモートでも対応できますが、ディスカッションやアイデア出しといった場面では、やはり対面のほうが効率的であると感じていました。

建設現場の近くに開館準備室を設置しましたが、感染対策の影響もあり、職場内で活発なコミュニケーションが生まれにくい状況が続きました。

結果として、準備業務はマイルストーンに従い、目の前の業務を一つずつ淡々とこなしていく進め方にならざるを得ませんでした。

また、この時期に、要求水準書では「（仮称）新・文化センター」とされていた施設名が「平塚文化芸術ホール」と正式に定まり、あわせて条例や規則についても順次整備されていきました。

周辺との直接的なコミュニケーションが制限される中でも、物事が着実に前へ進んでいくことに、ある種の安心や希望を感じていたことを覚えています。

今思えば奇妙にも感じられますが、当時は「ソーシャルディスタンス」「マスク会食」といった言葉が生まれるほど、社会全体が試行錯誤を続けていた時期でもありました。

制度設計と運営の実務

ホール運営は、会館が主催する文化自主事業も重要な役割の一つですが、実際の運営の多くを占めるのは、利用者の文化活動を支援する、いわゆる貸館事業です。

条例の制定により、平塚文化芸術ホールでは、ホール系施設は1年前から、会議室や練習室などの諸室系については6か月前から利用予約を受け付ける仕組みとなりました。

これにより、予約開始時期などの枠組みは定まりましたが、運営開始には、申請・許可・変更・還付といった一連の手続きを、現場で滞りなく回る形に落とし込む必要がありました。あわせて、予約システムの整備と運用習熟も並行して進めました。

舞台運用については、音響反射板や平台などの転換に要する時間、備品の配置や保管場所を含め、受付責任者・舞台責任者を中心に標準的な手順と所要時間を整理していきました。

大ホールの構成

平塚文化芸術ホールの大ホールは、ウイングおよびティザーを備え、間口・高さともに可変式のプロセニアム形式となっています。

実際の利用では、間口10間で使用することが多く、規模としてはいわゆる一般的な大ホールといえる構成です。

オーケストラピットも備えますが、ピットとして使うよりも舞台面まで迫り上げ、エプロンステージとして使うことのほうが多いです。また、吊物機構も巻き上げ式のため、舞台袖は意外とすっきりしています。ただし実際にケーブルラックや棚を置こうとすると空調の吹き出し口があったりしますので、設計者と適切に協議をすることが大事かと思います。

私自身は、ホール固有の「強い個性」は必要最低限に留め、表現の主導権は演出家や制作者が握れる“ニュートラルな器”であることが望ましいと考えています。このため色味が木目や黒が主体になったことは大変よいことだと感じています。

客席は3階席までありますが、1階席のみを使用した場合は700席に満たず、中ホール的な利用も可能となっています。

このことは観客が比較的少ない公演でも客席にまとまりが生まれる点や、出演者との距離を近く感じられる点など、運営を通じて想像以上のメリットだと感じています。

また、1階席・2階席・3階席では視点の高さが大きく異なるため、同じ公演でも見え方が変わり、「次は別の席で観てみたい」という楽しみにつながっている点も特徴です。

本ホールには一般的な織物の緞帳を設けておらず、両脇に常設の花道もありません（花道は仮設対応が可能で、下手側のみ部材を用意しています）。また常設のスクリーンもありません。

舞台管理の経験者として、これらのオミットは設計段階では一定の不安もありましたが、実際の利用においては、これらを強く求められる場面はほとんどありませんでした。

過剰な機能を持たせない構成は、今後の劇場整備においても一つの示唆を与えると同時に実演芸術で求められるものの変化というものも感じています。

多目的ホールの構成

平塚文化芸術ホールには、サブホールとして、多目的ホールが設置されています。ここは三分割した昇降グリッドが上部にあり、灯体はすべてLEDです。舞台や固定席はなく、必要に応じて仮設舞台を設置したり、スタッキングチェアを並べたりする仕様です。ホールというよりはスタジオというイメージかもしれません。

多目的ホールの特徴は両サイドがガラススライディングウォールになっていて、エントランスと公園の両側とも開放できることです。

この公園側のスライディングウォールを開放することで公園と一体利用をすることが出来ますが、空調効率の問題や音の問題、また秋冬には開口することによって枯芝が館内に入ってきてしまうこともあり、実際に運営をはじめてみると想定していなかった課題も少なくありません。

公園側スライディングウォール開口時には外側から微細な粉塵が侵入し、機器の光学系への付着等により不具合の要因となることがあります。供用開始後に、プロジェクターの修理を行った事例もありました。

また、多目的ホールでは大ホールのITV映像をプロジェクターから出力することができ、大ホールの楽屋・リハーサル室のような使い方も可能です。

共生社会を意識した空間構成

本事業の提案時期と重なる形で、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が施行されました。

私はこの法律を、文化施設が鑑賞の場を提供するだけでなく、共生社会の実現に向けて積極的な行動を求めるものとして受け止めています。

その考えを踏まえ、親子室を拡張したイメージとして「多目的室」を設ける提案を行いました。結果として大ホールには、親子室と多目的室を並びで配置し、1階席最奥部から個室として舞台を鑑賞できる構成としています。この多目的室は、障害のある方の利用を想定しつつも、仮設プロジェクターの設置、映像・編集用途、同時通訳、親子室の拡張利用など、柔軟な使い方が可能な空間です。特定の利用に限定しないことで、結果として利用の選択肢を広げることにつながっています。

また一方で、施設全体として来館者は図書館のような静寂さを求める人もいれば、児童館のように楽しく遊びたいと思う人もいます。友人と楽しくおしゃべりをしたい人もいます。新しいコンセプトの文化施設では、来館者にとってもマナーの線引きが分かりづらい状況が生じていました。運営としてはそれらを整理し、「他人に迷惑をかけないこと」「設備や備品を棄損しないこと」の2点の基本的ルールを設け、それを基準に来館者からの要望やクレームに対応していきました。これらは問題が起きた箇所には注意喚起文をたてて、利用者マナーを啓蒙していきました。

運営を通じて見えてきた設計上の気づき

供用開始後、実際の運営を重ねる中で、設計段階では見えにくかった点や、設計意図の効果を強く実感する点が明らかになってきました。

・サイン計画と来館者の行動

サイン計画は、準備期間中に設計者・平塚市・運営事業者の三者で綿密に検討を重ねました。

しかし、最終的にはある程度デザイン性をもたせた構成となったこともあり、結果として抽象性の高い表現となりました。施設に不慣れな来館者にとっては目的地が直感的に分かりづらく、総合案内への問い合わせが非常に多く発生しています。

来館者の行動を見ていると、「まず動いてみて、分からなければ人に聞く」という傾向が強く、サインは“見せる”ものというよりも、“迷わせない”ための補助として機能させることが重要であると感じています。一方で、総合案内の存在が非常に大きく、来館者の安心感につながっている点は運営上の強みでもあります。

・公園とホールの関係性

見附台公園と平塚文化芸術ホールは隣接しており、要求水準上は一体的な利用を促すため、境界をシームレスにした構成となっています。

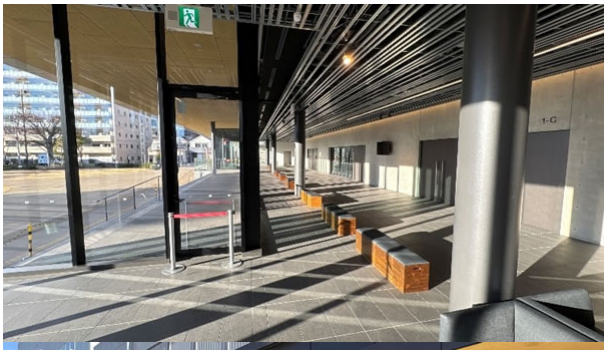
屋内外を連続した空間として捉えられる点は魅力的ですが、施設と公園でルールが異なる場面では、運営上の判断が難しくなることもあります。

例えば、施設敷地内は全面禁煙である一方、公園内では喫煙に関する禁止規定がありません。（火気使用については制限があります）

また、公園でイベントが行われている同時刻に大ホールでクラシックコンサートが開催される場合など特色の違う催事が同時に行われることもあります。これは来館者の期待値との調整が課題となることもあります。（厳かなクラシックを鑑賞する気持ちで来てみたら、公園に屋台や幟が出ていたなど）

これは文化芸術ホールの条例と都市公園条例という、異なる根拠法令による構造的な課題であり、運営のみで解決することは難しい部分です。

大ホールホワイエに面した屋外空間は大ホール利用者が使用できるスペースとして計画されていますが、通常はガラスのアコーディオンドアによって区画されています。屋外空間であるがゆえに、公園利用者が大ホール前の屋外スペースや階段に腰掛けてしまう場面も見られました。その結果、ガラス1枚を隔てただけの距離で、ホワイエ内で開演を待つ観客と屋外に滞留する公園利用者が近接する状況が生じることとなります。この状況を避けるため、現在は仮設のポールやチェーンを設置し、大ホール利用者の視界からある程度公園利用者を遠ざけるよう運用面で対応しています。多目的ホールも同様にある程度バッファとなる空間をつくるため、仮設のポールチェーンを屋外に設置しています。施設と公園をシームレスにつなぐ思想は「賑わい創出」や「共生社会実現」といった点からも非常に魅力的で可能性を感じる一方、運営事業者による補完が不可欠であることを実感しました。





また、このガラスアコーディオンドアは、設計の効果を強く実感することがあります。

駅や中心市街地からの最短ルートではないため、使用機会はそんなに多くはありませんが、短時間に大量の来館者が入退場する必要がある催事では、滞留が生じにくく、短い時間で入退場が可能です。

非常時には避難動線として活用できる点も大きなメリットです。一方で前述した、大きく開口することで空調効率が低下するという側面もあり、運用に当たっては注意が必要です。それでも公園側から大ホールを望んだ際に、間口いっぱいに開く入場口が生み出す景観は非常に印象的であり、建築的なスケール感と機能性を高いレベルで両立した空間であると感じています。



・ガラス面の多さと環境条件

館内はガラス面を多く用いた開放的な構成となっていますが、西日による眩しさや外気温など、時間帯や季節による環境条件で配慮が必要な場面もあります。特に西側にガラス面が多い大ホールホワイエや2階の文化芸術支援室などは西日の影響を強く受けます。夕方の時間帯には利用者から眩しさに関する意見が寄せられたこともあり、運営上の配慮が必要となるケースもありました。これについてはカーテンやブラインドの活用など、運用面で調整を行いながら対応しています。

・「見せること」と「使われること」

運営を始めると、「活動が見えることで関心を喚起する」という意図とは裏腹に、「練習や会議はあまり見られたくない」と感じる利用者が少なくないということもわかってきました。特に集中を要する練習や身内の会議などは、オープンな状態がむしろ心理的な負担になる場合があります。また、1階に配置している大会議室や大練習室は大ホール利用時に楽屋としても機能するよう導線が計画されています。そのため用途によってはオープンさよりもクローズドな環境が求められるケースもあります。こうした実情を踏まえると「見えること」が常にプラスに働くのではなく、利用目的や利用者心理に応じて視線を適切にコントロールできる余地が重要であると感じています。

「見せること」と「使われること」は必ずしも一致するものではなく、そのバランスをどのようにとるかは、設計と運営の両面から考えていく必要があるテーマであると、あらためて感じています。

・適正な人数配置とそれを支える安全装置

本施設では、業務内容や時間帯に応じた適正な人数配置を前提としています。

そのうえで、防犯カメラをはじめとした設備が、安全性と運営品質を支える重要な役割を果たしています。防犯カメラは個人情報保護への配慮を前提にしつつ、運営上は死角を減らす多角的な配置ほど、初動と安全確認の精度が上がり、結果として現場の負荷低減につながると感じています。また、外部に通じる扉の施錠管理についても、個別対応ではなく一括管理できる仕組みがあれば、運営負担はさらに軽減できたと感じています。設計段階では後回しになりがちな要素ですが、長期運営を見据えると不可欠な視点であると言えます。

新たに整備される文化施設に向けて

平塚文化芸術ホールは、設計段階から長期の運営を見据えた検討を重ねながら整備されましたが、それでも実際に使い始めてから見えてくる課題や気づきは少なくありませんでした。

これはメインとなる大ホールや多目的ホールの整備、メインテーマである賑わい創出や公園との一体利用などにリソースが割かれ、ディティールの部分は後回しになってしまったためです。

そのため、サイン計画、空間の開放性、公園との関係性、人員配置を支える設備計画など、いずれも図面上では整理できていたはずの事項が、実際の運用では、設計段階の想定どおりにいかない局面もありました。やはりこのギャップを埋めるには設計・構想段階で地域の特性を深く知り、想像力を膨らませることが重要であると再認識させられました。

私自身は、DBO方式は運営の実務を想定しながら、設計側に提案を行うという、非常に良い手法だと考えています。ただしDBOも絶対解ではなく、例えば運営3年程度経過した後に施設に若干の改修を行う余地を残すよう措置すれば、設計時の思想と実利用のギャップを埋め、よりよい施設整備ができるのではないかと思っています。

また実際の運営事業者はハード的な課題を抱えながらもそれを運用面で補完しながら施設運営を行っているケースが多いかと思います。運営事業者と設計建設事業者がよりコミュニケーションをとっていくことで、お互いを理解し、ハード・ソフト両面でよりよい劇場が今後もできていくものだと考えています。

文化施設は、竣工した時点で完成するものではなく、運営を通じて育っていくものだと感じています。設計建設事業者が作ったものを運営事業者が受け取り、利用者や自治体と一緒に育てていくものです。今後、社会情勢の変化や文化施策の改定はあるかと思いますが、平塚文化芸術ホールは、間違いなく長く地域に役立つ施設になるであろうと確信しています。

本稿で紹介した事例や気づきが、今後の文化施設計画や劇場づくりにおいて、設計と運営をつなぐ視点の一助となれば幸いです。

平塚文化芸術ホールの設計・施工のプロセス
「軽やかさやカジュアルさ」を目指して

株式会社シアターワークショップ　小林徹也

1. はじめに

弊社は設計段階からプロジェクトに参画し、竣工までの設計施工と管理運営の劇場コンサルティングを行い、開館後は管理運営における事業を担当している。

2.平塚らしいカジュアルさを求めて

事業者選定の際に、最初にチーム内で議論されたのは平塚らしさであった。ホール施設の客席空間が、一般的に重厚感のあるものが多いなかで、ハレの場ではあるが、平塚は、どこか軽やかでカジュアルなイメージがあり、市民が気軽に立ち寄れる雰囲気も重要であるとの共通の認識を得た。その時のイメージの一例として海辺に建つ仮設の飲食店のような軽やかであるが、湘南ならではのセンスの良さなども議論になった。

郊外型で観光等と一体になっている事例としてイギリスのグラインドボーンのオペラハウス等が話題になった。自然豊かな敷地の建物で、木の内装に包まれた客席空間、外部廊下に設置されているオーニング(仮設の庇)等のイメージなどにも共感が得られた。

またコンセプトとして、市民へ、いかに開いていくかということが重要で上演の情報の発信もさることながら、施設計画としても軽やかであり、入りやすいことを目指した。また、目前に大きな見附台公園があることで、施設といかに繋ぐかもテーマとなった。

3.オンリーワンを目指して重ねられた視察

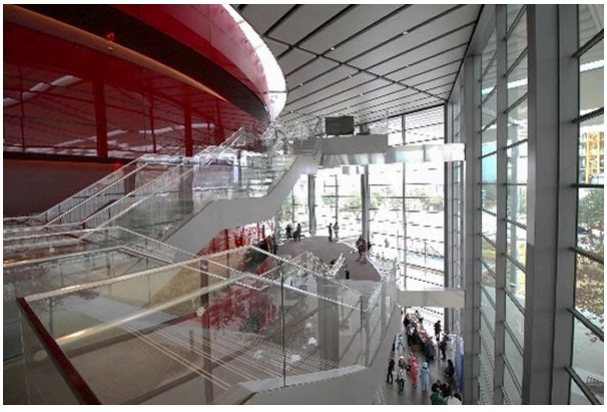
設計から施工の間に数多くの視察が実施された。これは様々な関係者が大勢いる中で、共通の経験と知識を持つことを目的とした。更に深い議論や詳細のイメージを共有する上でとても重要なプロセスであった。

事業者選定の段階では、東北と北陸の視察が実施された。東北では、北上文化交流センターで、日常的な賑わいを創出する共用部のアートファクトリーを視察し、大ホールの側壁がガラス張りで共用部と視覚的に繋がることなどを確認した。

釜石TETTOでは小ホールが、施設と外部広場のゲートのような形で、両側壁が開放されることでつながることや、ホールはコンクリートの塊ながら、周辺の諸室は鉄骨造でガラス張りの諸室で構成され、軽やかに創られていることなどを確認した。

事業者に選定された直後には、アメリカへの視察も実施された。ニューヨークとダラスに渡り、数々の劇場群を視察し、街と劇場との関係や最新の劇場空間の意匠や計画等を確認した。

その後も、中国地方、九州地方などの視察を実施した。更に施工段階で施工者と共に最新事例を視察したことは、情報の共有のみならず、高品質な施設を施工するという目線合わせの意味でも重要であった。



軽快なダラス、ウィンスピアーオペラハウスのホワイエ

4.矩形の敷地に対する2つの配置方法

敷地が矩形の際には大きく2つの配置が考えられる、釜石TETTOの様に敷地の長手方向に舞台と客席の軸を置いてホールを中心にそえるパターン。もうひとつが津市のアルスプラザや、四万十市のしまんとぴあ等にみられる、敷地の短手方向に舞台と客席の軸を置きホール片側によせ、その他の諸室と共用空間を広く確保するパターンである。

後者の方が共用空間をまとまって広くとれ、様々な諸室との連携がとりやすい反面、凡そ敷地の短手方向は50m程度が多いためホール全体の奥行が狭く若干窮屈になる傾向にある。平塚でも当初は、この二つの配置が平行して検討されたが、最終的には短手方向にホールの軸をとプラン配置が採用された。

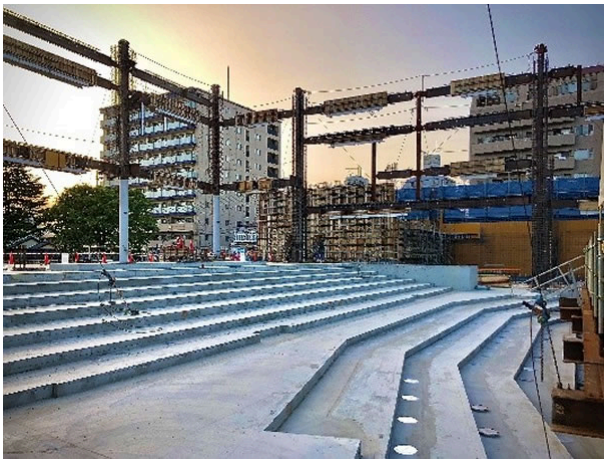
短手にホールの軸をとったことがホールそのものの形状や空間特性を導いている。ホールは比較的幅が広く1階席のプランは、側壁が舞台に向け少し広がった矩形をしてサイドバルコニー席が桟敷席の雰囲気を出し、どこか歌舞伎劇場のような取り囲み感がある。

5.傾斜を抑えながら鑑賞環境に優れた客席空間

最近の中規模以上の客席の断面計画は、1階席にも列ごとに十分な段差をつけ勾配を高くし、視線の確保や床の音響の反射等を獲得する事例が多い。一方でその形式では、ホールのエントランスであるメインのホワイエが2階になってしまうことが懸念点として挙げられる。

民間の劇場では、帝国劇場や歌舞伎座等では1階の都市の地面のレベルから客席空間に入ることにこだわっている。これは街とのつながりを強く意識していることに起因している。

平塚においても前面の広場とのつながりを重要とし、1階席はグランドレベルか入る計画とし、帝国劇場や歌舞伎座の様に、1階席の段差や傾斜は列ごと丁寧に検討することで、必要十分な視線を確保した鑑賞環境として計画された。また、1階席の傾斜が抑えられたことで、2階席と3階席のレベルも低く配置され、見下ろし角が抑えられ、距離感も近く計画されている。



施工段階での1階席の段床のスラブ

6.取り囲み型とコンパクトさを意識した客席空間

客席の平面計画に関して1階席は歌舞伎劇場のような、幅広の四角い空間で、2階席と3階席はかぶりの少ない形で重ねられ、3階席の奥まで含めると縦長のシューボックスの形状となる。

サイドバルコニー席は舞台に向けて垂直ではなく少し開いたプランとなっており、そこに、俗に「電車型」といわれる縦通路を横に従えた1席ごとの縦列配置としている。サイドバルコニーは平面的に視覚条件が厳しく、日本では見え辛い席として評価されるが、観客で取り囲むことを重視し、1列のみであること、開いていること、電車型であること、レベルが抑えられていること等の最大限の対処をした計画された。

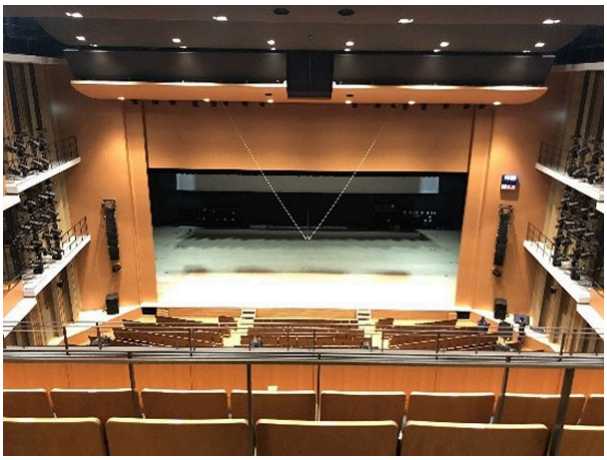
3階席のホワイエはなく2階席の脇から3階席に上る階段があり、延床面積のコンパクト化につとめている。3階席に関しては避難の考え方等で施工段階まで消防との認識合わせ等に労力を費やしていた。特に横通路が出入口に直通するという、直通の解釈(レベル差の有無等)も課題となっていた。



矩形かつ取囲み形の客席空間

総じて、客席は近い距離から観客が演者を取り囲む空間を実現している。

また客席空間は当初は白い内装で計画されていた。カジュアルさや軽やかさなどの印象を牽引するものであった。計画の途中で施主側から明るい木の色合いが良いとの意見があり現在の色彩となっている。



3階席からも良好な鑑賞環境

7.機能性に優れた舞台

舞台は必要十分な広さを確保している。特徴としては舞台のプロセニアム脇のサイドギャラリーはないものの、舞台機構により東西幕バトンとは別にサイドライトバトンを設置している点が挙げられる。

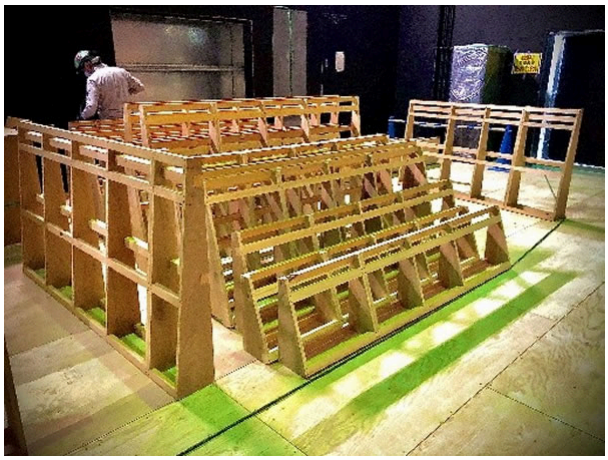
また舞台の空調吹出しが舞台幕を揺らしてしまうことが都度懸念されるが、平塚では、居住域空調で風速を抑えた吹出しが舞台床近辺の側壁まで下りてきている。一般的には居住域空調の際には吹き出しの半円型の大きなボリュームが出てきてしまうが、平塚では壁をふかしその中に薄いノズルを入れ込むことにより舞台袖の空間を最大限利用できるよう工夫されている。これに伴い、各設備の盤等も全てふかし壁の中に収めることで、各種電源盤などによる不均等な凸凹はなくなり、物理的な整理がしやすい形状となっている。



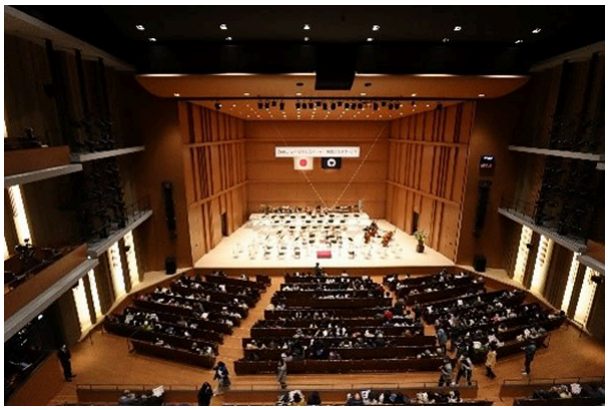
空調吹出や盤の凸凹のない舞台側壁

舞台機構の音響反射板は、下地の木組が工場で制作され、パーツをくみ上げていく手法が実施されており、安全性の確保と、工期の効率化が図られた。

プロセニアム空間においては、スピーカの配置方法が議論となり、サイドスピーカはプロセ壁へ、サブウーハンを中心に上下にライアレースピーカを配置し、センタースピーカは、天井面の中に収納したが、天井板の建築音響の反射の面と、スピーカの三次元の広がりを両立させた意匠的にも特徴的な形状となっている。



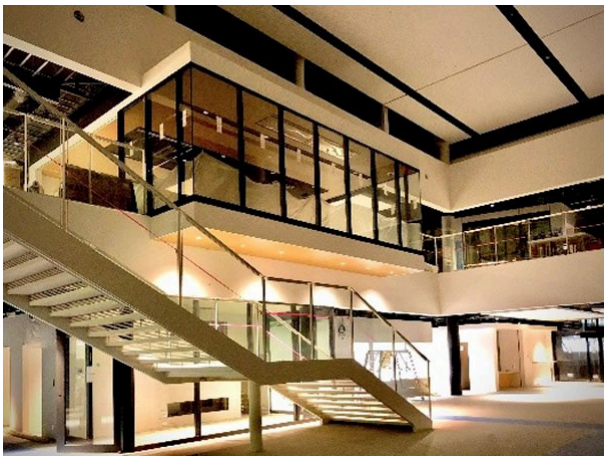
工場で制作された音響反射板の下地ユニット



音響反射板形式での開館式典

8.魅力的な共用空間(路地空間と施設の開放)

北上市文化交流センター以降、共用空間を単純な待合いや移動のスペースとしてのみではなく、日常的な市民の居場所となる「サードプレイス」としての役割を担い、今後は弊社が提唱する交流や新たな創造が生み出す「フォースプレイス」として積極的な施設の意義が期待されている。



張り出した文化芸術支援室

平塚においても、交流できるロビー空間があるだけでなく、大小様々な広さの路地空間を取り込むことによって、一人から少人数、大人数の市民が日常的に憩う場所となっている。ガラス張りとなっている創造支援の諸室において2階の文化芸術支援室は、エントランスホールの吹き抜け空間に向けて少し張り出すことで、そこの活動に自然と目が行くような建築的な工夫がなされている。



2階の広めの共用空間

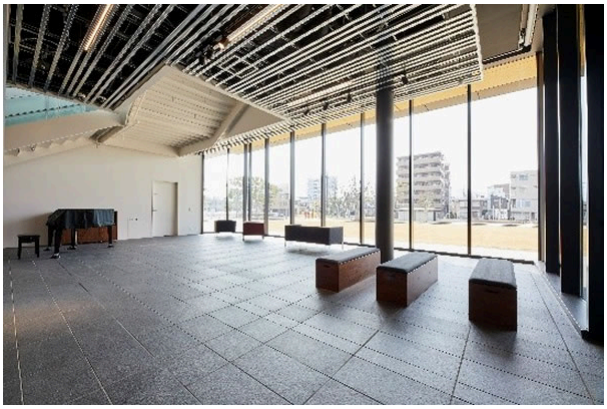


個人利用もできる共用空間

大ホールのホワイエの上手側には階段の横に、こちらも見附台公園に向けて張り出している部分があり、小さなステージのような、外からはガラス張りのショーケースのような空間となっている。

茅野市民館や由利本荘市カダーレ、釜石TETTOなどでは、超多機能ホールとして客席を段床から平土間を可変し、平土間になった際に室内外へと物理的に繋ぐことで、ホールを開き施設を開くことを実践してきた。

平塚では、多目的ホールの側面が両側開くことにより、見附台公園と多目的ホール、エントランスホールと多目的ホール、更には見附台公園とエントランスホールを繋ぐことができる。可動壁もガラスのものとボードのものと2重のため、完全に閉じることも視覚的に開放すること物理的に開放することを可能としている。



ショーケースの様な大ホールホワイエの角の空間

また、大ホールは可変型のホールではないため、1階席が平土間になる様な客席可変はないが、固定の段床がありながら可能な範囲での開放と、舞台上演の雰囲気が共用空間へ染み出すような工夫がなされている。エントランスホールの突き当りにあたる、客席上手側の壁が二重のガラスで中がのぞけることで、正面にホール空間があることを示唆している。また、1階席の後ろが多目的室になっているが、ホワイエ側の壁が開いて小さな舞台になったり、ホワイエの延長として、舞台をのぞけるような工夫がなされている。



多目的ホールの側壁2面は開放可能



客席側面と後部に設けられたガラス壁面



多目的室がホワイエに開放され舞台となる

9.まとめ

平塚文化芸術ホールは事業者選定時期から視察を重ねるなど、早いタイミングから膨大な情報共有と多様な議論の上で設計内容の精査が行われた。その結果、プランは機能的かつ効率的であり、様々な活動が盛り込めるよう計画された。

また意匠に関して共用空間の白い壁面と黒い窓枠の構成は、どこかインターナショナリズムを感じられるなど、設計者の個性も活きていると感じられる。

そして施工段階に至るまで一貫した高い熱意をもって詳細まで突き詰められたことで、平塚にしかない、軽やかでカジュアルながら高品質な劇場・ホールが実現したと捉えられる。



オープニングでの公園を活用した催事

まちづくりの新たな拠点としての平塚文化芸術ホール

清水建設・安井建築設計　設計共同企業体
清水建設株式会社　内矢雅清
株式会社安井建築設計事務所　楠木賢一
古賀愛乃

01. 事業と計画の背景について
歴史的に人があつまる場所を将来のまちの在り方も見据えて再構築

平塚文化芸術ホールがある見附台地区は、平塚駅の北西の徒歩8分程度に位置している。地名の「見附台」は、旧東海道の宿場「平塚宿」の境を示し、宿場を防衛する見張りの門の役割を果たした「見附」からきており、地区内に江戸側の「江戸見付」が緑地として整備されている。また、歌川広重の浮世絵「東海道五十三次　平塚　繩手道」に描かれている舞台も見附台地区からは近い場所である。近代になってからもこの地区には平塚町役場、市議会議事堂、尋常高等小学校、市体育館、旧市民センター（1962年開館）や旧崇善公民館などが建っていた経緯があり、平塚の中では歴史的にも人が集まる場所であった。

市体育館が解体された後は、見附台公園＋見附台広場が一体となって、日常的に幅広い世代に利用（子供の遊び場、親子の休息の場、ゲートボール等市民活動の場）され、長年にわたり文化・芸術・スポーツ活動の場として市民に親しまれてきたエリアである。

平塚の街は駅の北側に国の火薬工場（元徳川家康の鷹狩り場）があったことから、第二次世界大戦の空襲で「商都平塚」と呼ばれていた市街地の街並み、歴史的建造物はほぼ消滅してしまった。そこから戦後の復興を願って、1951年に第1回の七夕まつりが開催されるようになった。七夕まつりでは駅北側の商店街から人が連続して流れて来て、長年、見附台公園・見附台エリアはステージや屋台が出る会場となっていて、大勢の来訪者で賑わい親しまれてきた。現在では3日で100万人以上が訪れる「湘南ひらつか七夕まつり」となり、2025年で73回を数えている。


歌川広重『東海道五十三次　平塚　綱手道』


旧市民センター

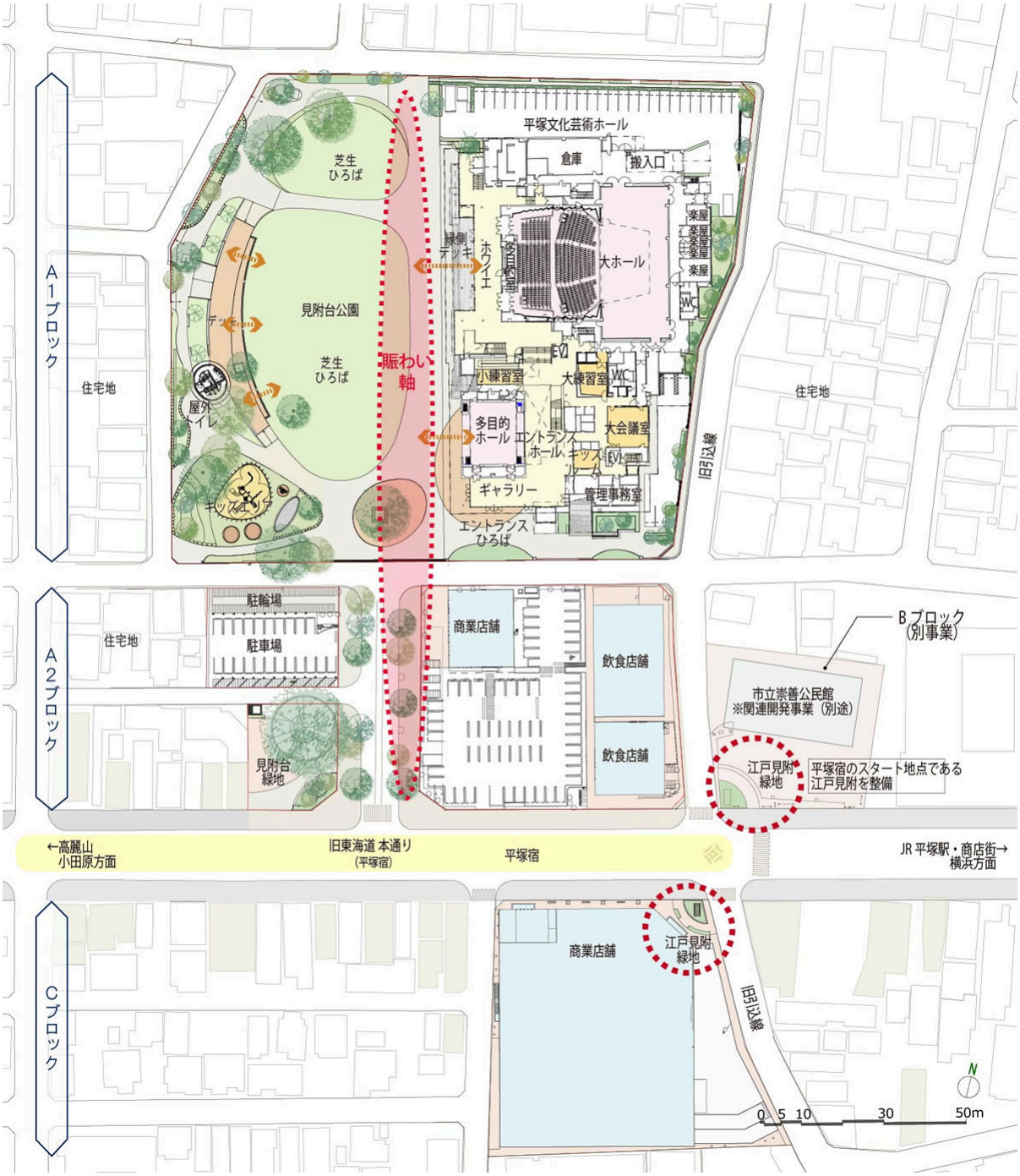
平塚の市街地は、近年、平塚駅の北東の総合公園や美術館・博物館・市役所・らら ぽーと湘南平塚があるエリアの方へ向かう人が多くなっていることから、駅北側の中心市街地を介して、東西の人の流れをつくり出し、その間をつなぎ、にぎわいを創出する役割も担う見附台周辺地区整備事業の一環として、本施設は市の都市計画公園の見附台公園と南側の商業施設・緑地とともに一体的に整備された。



平塚駅を中心とした広域MAP

事業整備範囲は平塚文化芸術ホールおよび見附台公園（Ａ１ブロック）に加えて、旧東海道を挟むＡ２ブロック・Cブロック（定期借款による民間収益施設の整備）が含まれ、エリア全体で多くの人々が訪れる場を創出し、さらに平塚駅北西エリアの活性化とポテンシャルを高めている。全ブロックおよび隣接する公民館の外観を落ち着いた色調で統一し、旧東海道から見附台公園へ至る南北のメインアプローチ部にＡ１ブロック内と共通のバナー付照明を配置して来訪所を導く計画としている。またＡ１・Ａ２・Cブロックの東側には歩道を連続整備（一部敷地を供出）し、来訪者および住民の利便性を高めている。

駅からのアプローチとなり、人が立ち止まる交差点角地には「江戸見付緑地」を整備し、今回の事業整備の起点（目印）となっている。また、南側の旧東海道から公園内と本施設西側を通り、北側に至るまでを事業整備範囲内における「賑わい軸」として設定し、商業施設（マチカフェ）や展示スペース、多目的ホール、大ホールホワイエ等を配置している。



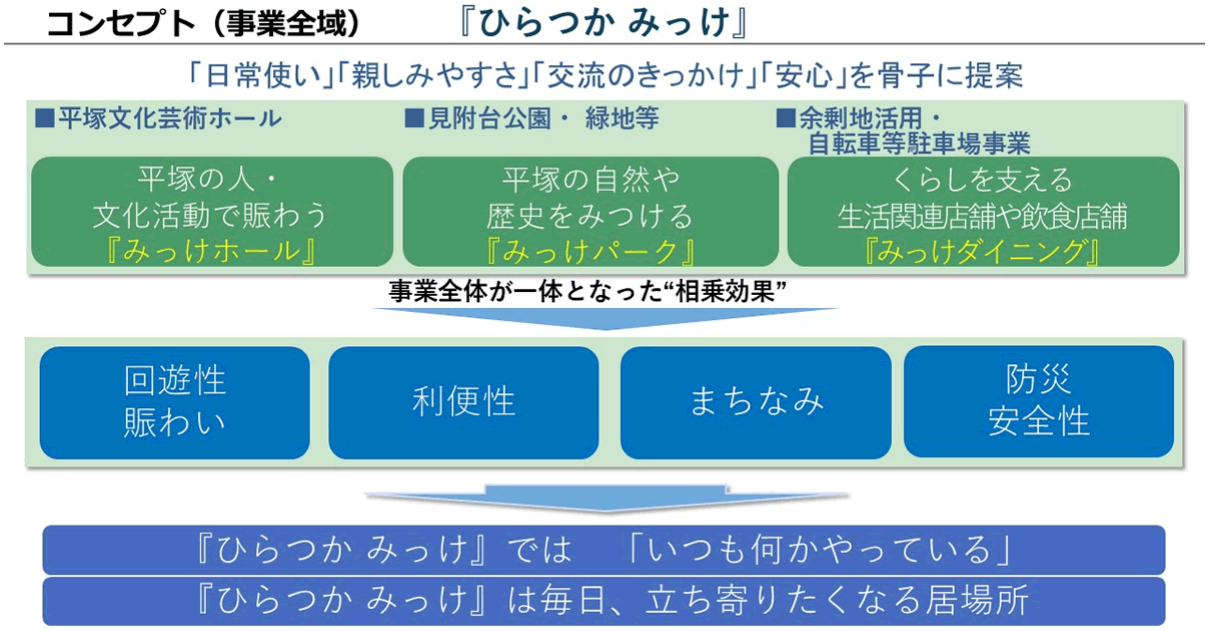
見附台周辺地区全体配置図

誰にでも親近感が持てる日常の居場所と新しい賑わいの場を創出

見附台地区は「江戸見附」につながる「みつける」をテーマに、「日常使い」「親しみやすさ」「交流のきっかけ」「安全安心」を骨子にして、「ホール」「パーク」「ダイニング」として計画・運営を行っている。

地区全体として目指す方向性として、①回遊性や賑わいを創出し、日常使いや交流を生みだすこと。②利便性の向上として、生活に密着した市民のための場所を創ること。③まちなみ創出として、自然環境と歴史資源を活かし、旧東海道沿いを整備すること。④子どもたちが安心して遊べ、多くの人が集うエリアとして防災にも配慮した見通しのよい安全な場所とすることの4つであった。

見附台地区と平塚文化芸術ホールはいつも何かやっている、毎日立ち寄りたくなる居場所になり、事業全体で一体となって、様々な相乗効果を生み出している。



見附台周辺地区全体コンセプト

エントランスホールに諸室が顔を出す内部配置と周辺環境に調和した外観構成

本施設は市民の文化芸術活動の新たな拠点であり、さまざまな世代の日常の居場所となることで、新たな人の流れ・人が集まる場所を創出する役割が期待されている。エントランスホールのまわりに、大ホール（約1200席）、平土間形式の多目的ホール（約200席）、大小練習室、文化芸術支援室、会議室、各種展示・情報コーナーなどをもつ複合施設である。

外観は、巨大になりがちな劇場施設のボリュームを分節してランダム配置することで、「平塚宿」の宿場町の旅籠が連なるイメージを表現するとともに、旧市民センターの外観の白を基調とすることで近隣への圧迫感の低減も図っている。公園側及び正面（南側）の低層部は大庇と端正で透明性の高い空間とし、ガラス越しに人の活動が景色となる親しみやすい姿を目指している。

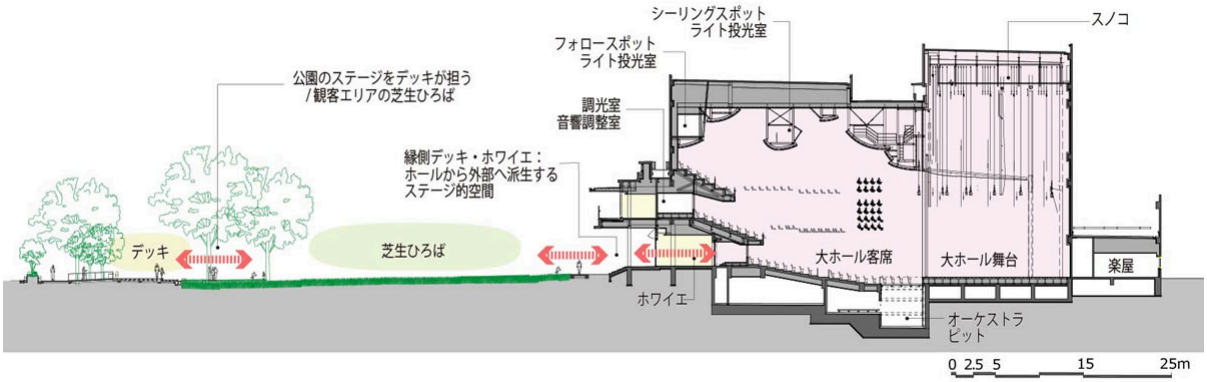


全景鳥瞰写真



外観夕景写真：正面（南側・旧東海道側）

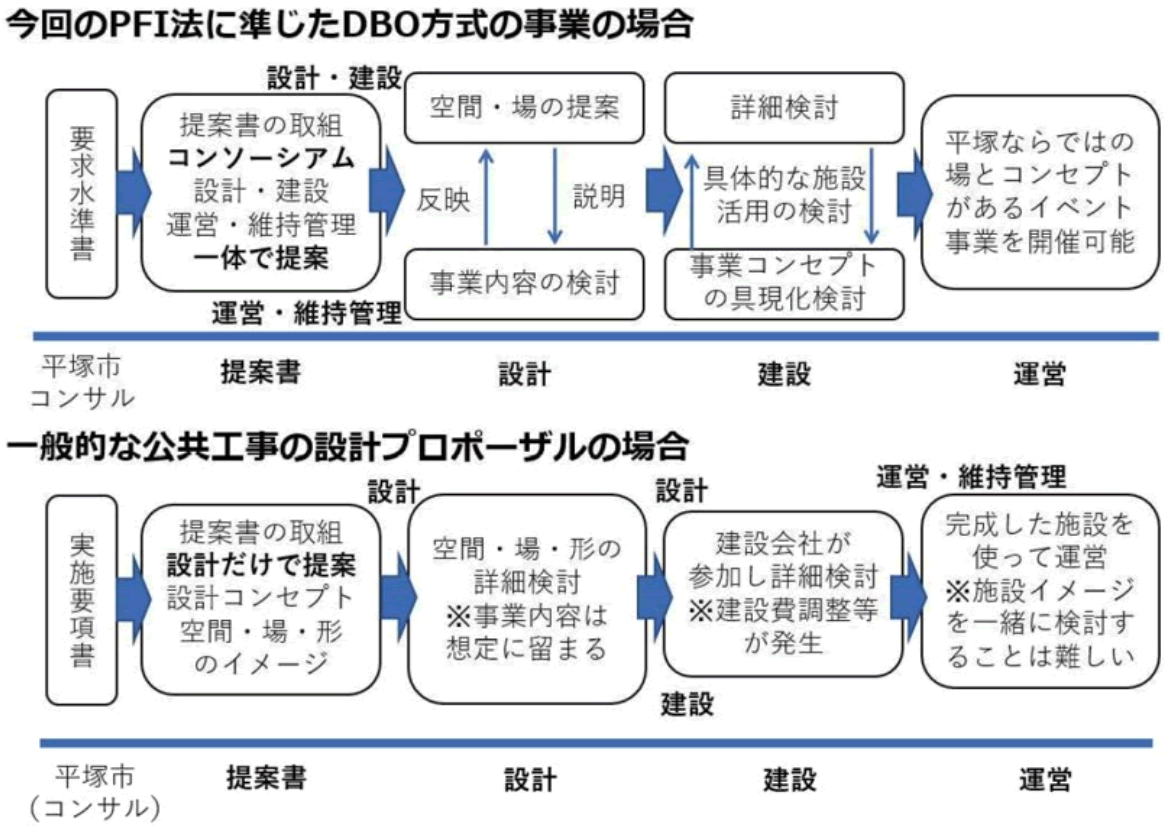
見附台公園との一体的な賑わいの創出のために、大庇は人々を大きく包み、建物の外部と内部をつなぐ役割を果たしている。また大ホールホワイエ・多目的ホールがグラウンドレベルで公園と直接つながる断面計画とし、大開口を開くことで一体利用を可能とし、どこでも舞台や客席となる計画としている。



ホールホワイエと公園がつながる断面計画図

PFI法に準じたDBO方式の事業（民間活用）を十分に活かした施設・運営企画づくり

本事業の設計・施工・運営のスキームは、PFI法に準じたDBO方式の事業（民間活用）であった。事業コンペの時からコンソーシアム内の4分野「設計」「建設」「運営、維持管理」「事業企画」＋「舞台設備」が共同で、コンセプトメイキングと建築計画の骨格をしっかりと共有できていた。そのことで事業者に特定された直後にコロナ禍に見舞われたが、基本設計スタートから建築計画と運営・事業企画の両面で共に、スムーズに連係することができて、普段使いの場所づくり＋多様な公演が可能となっている。この地にふさわしい文化芸術活動の場に加えて、市民交流の場づくりが実現している。



事業コンソーシアム概念図

公共ホールは設計・建設が先行し、後から運営者（指定管理者になる場合もある）が（竣工後に）参入するケースもあり、設計者とホールの運営・イベント企画事業者間でコンセプトの共有意識を図ることが難しいこともあり、施設が十分に活かされないこともある。またホールの貸館業務が中心となってしまい、本来、晴れやかな場ともなるホールは、イベントの無い日は施設が閉鎖的となり、人の気配が感じられない寂しい印象となることもある。

しかし本施設は、公園に訪れる多世代の人の姿のみならず、施設内のオープンスペースのテーブル・ベンチにも子ども・生徒から社会人が想い思いにすごしている姿や、公園に面した大ホールのホワイエ空間の開放（恐らく他のホールにはほとんどない）と公園ひろばと連動したステージ構成・イベントの実現などは、運営・企画チームが設計コンセプトに共感し、日々の運営や様々なイベントに応用していくことを努めていただいている点が大きいと感じるところである。

平塚の過去と先の未来をつなぎ、人と活動、人と人をつなぐ存在になってきている。

02. 施設計画について

「みんなが、みつける、つながる、はぐくむ」ホール＆パーク

施設コンセプトとして“「みんなが、みつける、つながる、はぐくむ」ホール＆パーク”を掲げ、次の3つを軸とした。

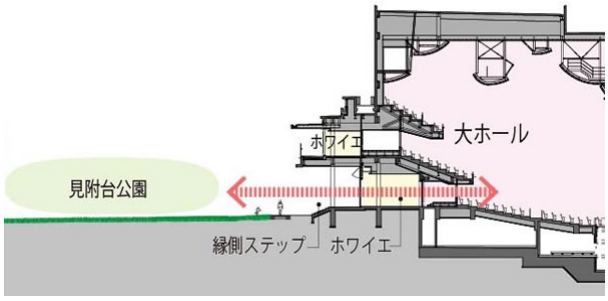
- まち・公園とホールがグランドレベルでつながる
- 普段使いの様々な『居場所』
- 市民に愛されるホール

1）まちとホールがグランドレベルでつながる―どこでも舞台や客席となるホール＆パーク

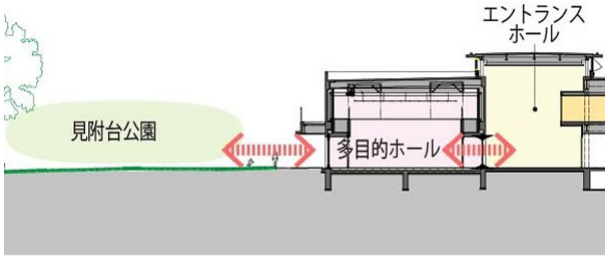
通常のホールは1階席後方が２階ホワイエに接続し、ホール背面はバックゾーンになってしまうが、今回計画では１階席の勾配を緩やかにし、ホワイエ・縁側ステップを介して公園に接続できる構成とした。

半屋外空間の縁側ステップは、平素はベンチとして休憩したり、舞台として利用したりでき、大開口を開け放つと公園との人の流れが生まれる、オープンで多機能な空間である。

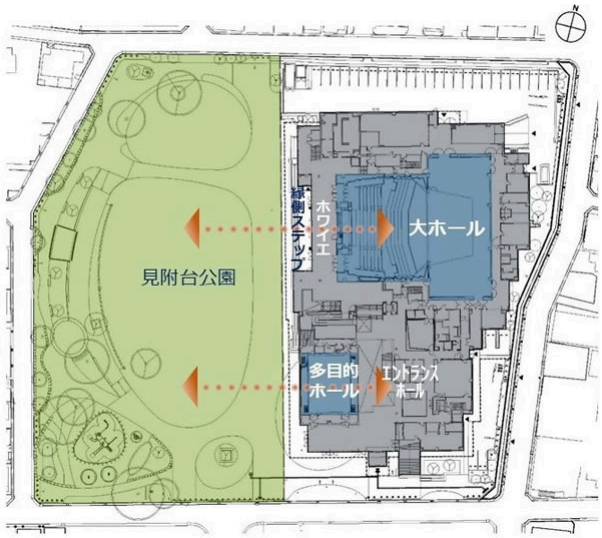
また、多目的ホールはエントランスホール・公園と隣接させ、大開口を開け放して一体利用できる計画とした。



公園―大ホール　断面図



公園―多目的ホール―エントランスホール　断面図



配置図



大開口から公園へ人々が流れ出す



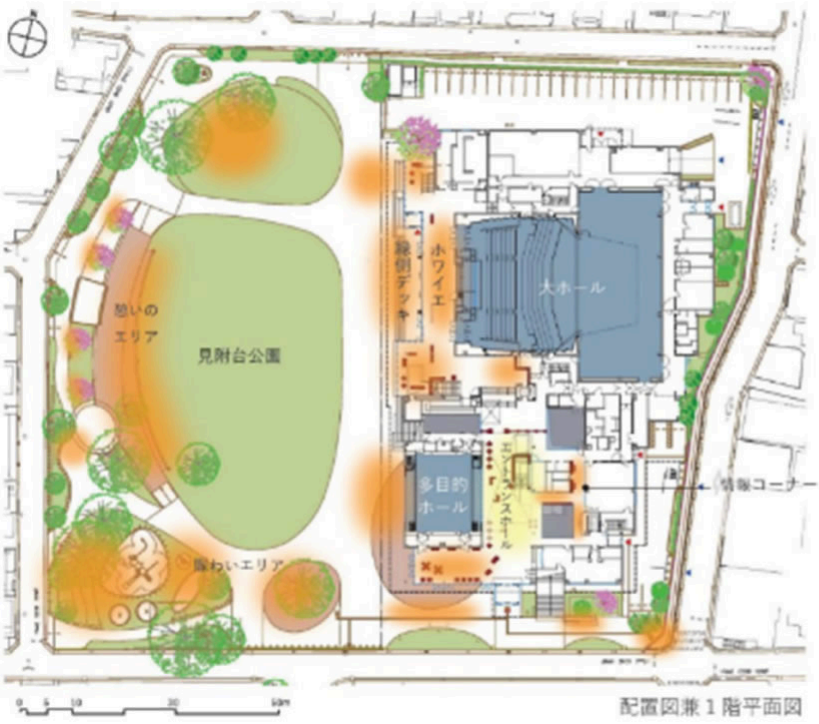
休息や語らいの場としてのベンチ利用



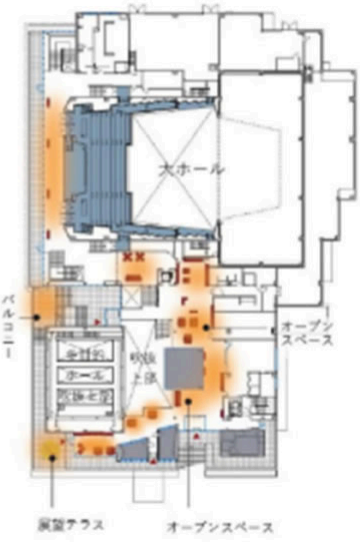
ステージとして利用

2）普段使いの様々な『居場所』―分散しながらちりばめられた集合体

オープンスペースや路地をちりばめ、情報発信や人々の憩いのための様々な仕掛けを配置することで、あらゆる世代が普段使いの自分の居場所をみつけ、使う人の想像力が喚起される空間構成とした。



配置図兼１階平面図



２階平面図

○様々な賑わいが顔を出すエントランスホール

2層吹抜のエントランスホールを中心に施設を構成し、大ホール・多目的ホール・大小練習室・文化芸術支援室・大小会議室・和室・各所オープンスペースが顔を出し、賑わいを創出する。





様々な賑わいが顔を出すエントランスホール

○公園・エントランスホールと一体利用が可能な多目的ホール

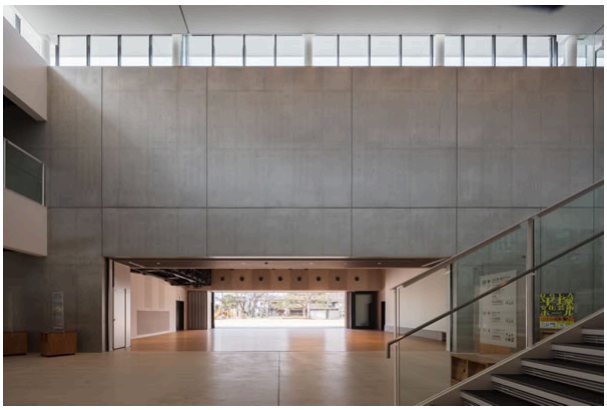
多目的ホールは　平土間形式で最大200人を収容し、音楽や演劇、ダンスから講演会・展示会まで多様な演目に対応することが求められた。

本施設の顔としてエントランスホールと公園に挟まれた位置に配置し、エントランスホールおよび公園の両側に、それぞれガラスとパネルの遮音スライディングウォールを2重に配置し、それらを全て開け放つと、エントランスホール～多目的ホール～公園がつながり、一体利用が可能な計画とした。

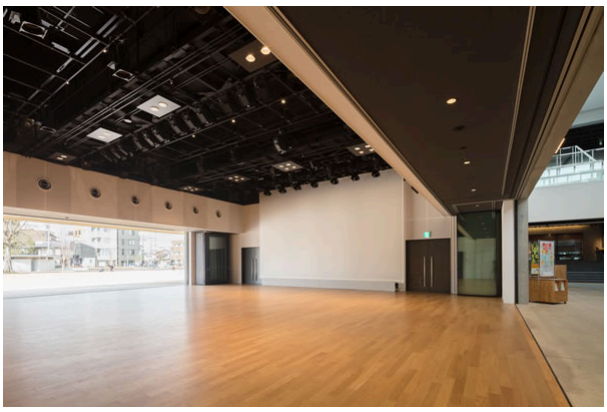
様々な演目・舞台位置・客席形式に対応するため、3台の昇降式グリッドバトンとそれを取り囲む目の字型のキャットウォーク、技術ギャラリーを配置した。

大ホールとの同時利用を可能にするため、Box in Box構造とし、ホール内の仕上面（パネルのスライディングウォールを含む）はフラッターエコーを防ぐために、対面する壁は吸音・反射要素が交互に配置されている。

多目的ホールは実に様々な使い方をされている。公園側のガラス面越しの風景をバックにしてピアノコンサートを行い、エントランスホール側を開け放してエントランスホールまで観客があふれ出したり、公園側の大開口を開け放ち公園から自由に出入りできる一体的なイベント利用等、ハード面の特徴を熟知した運営の様々な工夫がなされている。



エントランスホールから
多目的ホール・公園を望む



大開口によりエントランスホール・公園と
つながる



公園をバックにしたピアノコンサート風景

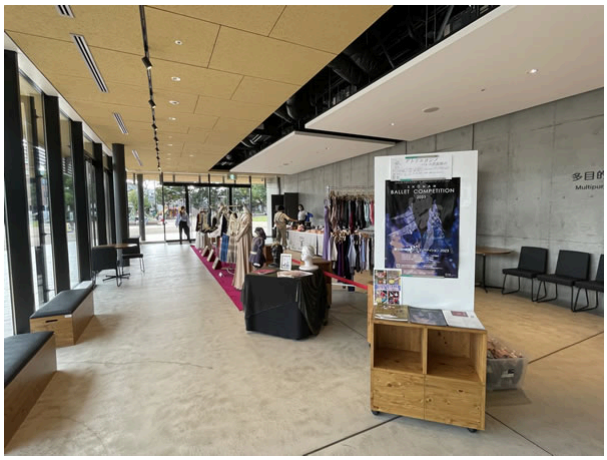


公園からも自由に出入りできる一体的なイベント風景

○エントランスホール吹抜まわりの諸室・オープンスペース

多目的ホールホワイエ・待合

多目的ホールの南側は多目的ホールホワイエや待合スペース、ギャラリー等、様々なシーンに対応できるスペースとして計画されている。神奈川県産桧材で製作したベルトパーテション付きのBOXや展示用家具・展示パネルはキャスターがあることで、スペースを分割しながら使うことも可能である。移動可能な「屋台」は様々なイベントにおいて来訪者を迎える顔となる。



多目的ホールホワイエ：バレエ展示の様子



「屋台」がイベント来訪者を迎える

大練習室

1階大ホール近くに位置し、大ホールのリハーサル室としての位置付けに加えて、単独での音楽演奏・バレエレッスン・講演会等、幅広い利用が可能である。防振防音構造（Box in Box）とし、カーテンによりバレエ用大鏡・レッスンバーを隠すことができ、吸音量を調整できる計画としている。



大練習室：エントランスホール側から内部の活動が見える



大練習室：内部からエントランスホール側の活動が見える

小練習室

バンドや管弦楽器などを少人数で練習できるスタジオとして、2階南側に2室配置した。防振防音構造（Box in Box）とし、平行な壁を作らないことでフラッターエコーを防ぎ、天井と壁で必要な吸音性能を確保している。



小練習室：共用部側から内部の活動が見える



小練習室内観

文化芸術支援室

2階から吹抜に一部飛び出す形で配置された文化芸術支援室は、工作・絵画等の活動ができる部屋で、四周ガラス張りで中の活動が見えるようになっている。南北がガラスのスライディングウォールとなっており、開け放つことで共用部と一体空間とすることができ、開放的なイベントやギャラリーとしての利用が可能である。



文化芸術支援室：共用部側から内部の活動が見える



文化芸術支援室：共用部と一体的で開放的なイベント状況

キッズルーム

1階受付脇に配置し、2面をガラス張りとして、受付およびエントランスホール側から見守りができる計画としている。遊具や絵本講師が選定した絵本を置き、平時に親子で過ごすことができる。また、定期的にベビーマッサージ教室や絵本講座が開催されている。



キッズルーム内観

大会議室

1階情報コーナーの東側に位置し、会議室やイベント会場、イベント控室として利用されている。スライディングウォールで大小2室に区切って利用することもできる計画としている。廊下は全面ガラス張りで、中の活動が外部ににじみ出し賑わいを創出する。



大会議室：共用部側から内部の活動が見える



大会議室：イベント開催状況

小会議室

多目的ホールの1階北側に位置し、平時は会議室として利用される他、多目的ホールの楽屋としての利用が可能な計画としている。



小会議室内観

オープンスペース・情報コーナー

1・2階のエントランス吹抜まわりに、平塚の魅力、地域活動や文化芸術に関する様々な情報を得られる情報コーナー、休憩や勉強などのためのオープンスペースなど大小様々なスペースをちりばめた。

学校帰りの高校生が日常的に勉強したり、公園を訪れた親子が休息したり、イベントがないときでも賑わい、市民に親しまれている。各コーナーには神奈川県産桧材のオリジナル家具を配置している。350mm角のBOXを基本モジュールとして、各スペースの用途にあわせてアレンジされている。



2階オープンスペース



2階オープンスペース・平塚に関する情報コーナー



1階情報スペース



1階情報スペース

和室

2階東側の和室は8畳に炉を切り、お茶会や茶道教室行える本格的な設えとしている。地元の茶道協会からもヒアリングを行い計画に反映している。また、茶道だけの利用ではなく、施設全体で開催されるイベントの控室利用等、柔軟な運用が行われている。



和室内観

3）市民に愛されるホール

高い音響性能を有し、様々なシーンに対応できる多機能ホールとし、「平塚らしさ」が感じられ市民に愛されるホールを目指した。

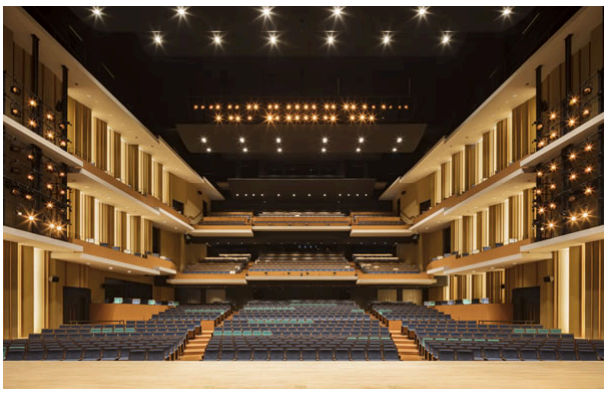
大ホールはオーケストラから演劇・講演会まで、幅広い演目への対応が求められた。

1階席約650席、2階席までで約1000席、3階席までで合計1200席の3層構成の客席とし、様々な用途や客席規模に応えるとともに、最大視距離を30mに抑えサイドバルコニーで取り囲み、舞台と客席が近く一体感や臨場感のあるホールを目指した。また、丁寧な視線検討により、1階席が後方で公園とつながるよう傾斜を極力抑えながら、どの席からでもよく見える客席配置を実現した。

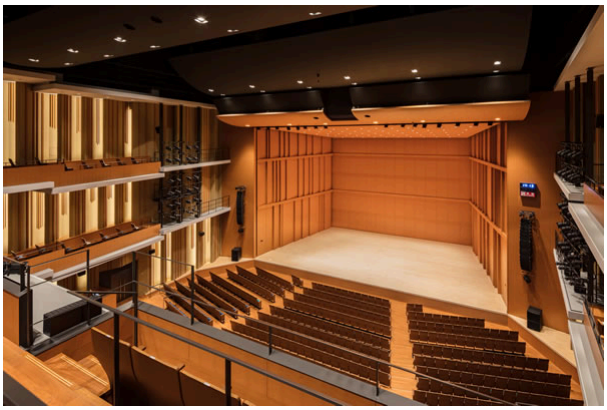
可動音響反射板・可動プロセニアム・オーケストラ迫りを備え、様々な演目に対応する多機能ホールとしている。

大ホールは鉄骨鉄筋コンクリート造とし、高い遮音・防振性能を確保している。客席天井は室容積を確保しながら天井からの初期反射音が均一に客席に到達するよう、大天井の下に浮雲状の曲面天井を設け、客席側壁は折板形状とし舞台からの音を客席奥に送り出し、バルコニー席は音響庇として機能し、2回反射音を客席に豊富に到達させている。

また、側壁に設けられた形状・角度が異なる木製ルーバーや壁面の塗装の細かなザラツキは反射音を適度に拡散させることに寄与している。

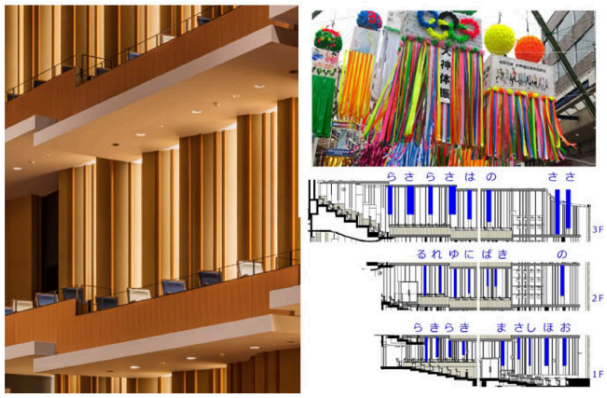


大ホール：舞台から客席を臨む

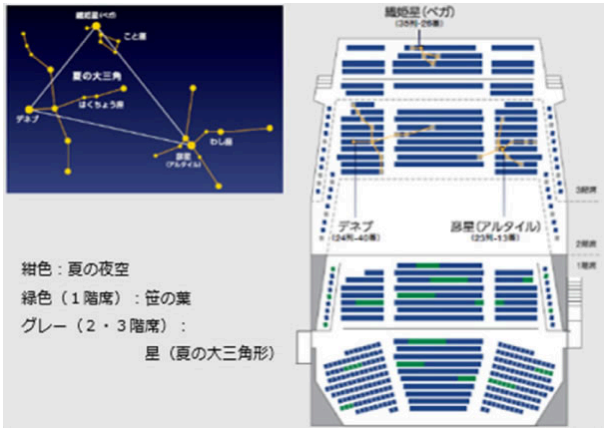


大ホール：客席から舞台を臨む

平塚は「湘南ひらつか七夕まつり」で有名であるが、七夕まつりの短冊や吹き流しをモチーフとした壁面デザインとした。また座席の張地の配色は「七夕の夜空」をイメージし、濃紺の夜空に笹飾りの緑色が差し、「夏の大三角形」の星座をちりばめたデザインとすることで、通年的に「平塚らしさ」を感じられるホール空間とした。



七夕まつりの短冊や吹き流しを
モチーフとした壁面デザイン

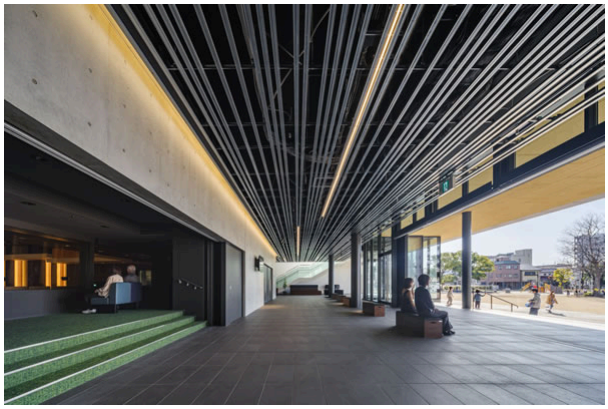


「夏の大三角形」の星座をちりばめた
座席配色デザイン

大ホール1階席の後方と側面に大きなガラス開口を設け、ホワイエ側から大ホール内部が開かれたつくりとしている。（演目により遮光カーテンで完全暗転可能）この開口により、大ホールはホワイエを介して、エントランスホールや公園とつながっている。ホール開放イベント時などに、来館者が大ホールを覗き込むことで文化芸術に関する興味を誘発されることをねらっている。

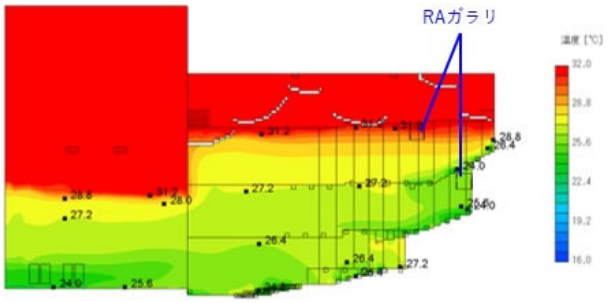


大開口により大ホールと共用部・公園がつながる



大ホールと公園がつながる

空調計画について、舞台は幕揺れ・音に配慮した置換空調方式とし、舞台近くの側面から風速を抑えた吹出しを行い、客席は床吹き出し方式による居住域空調を行っている。



大ホール居住域空調のシミュレーション

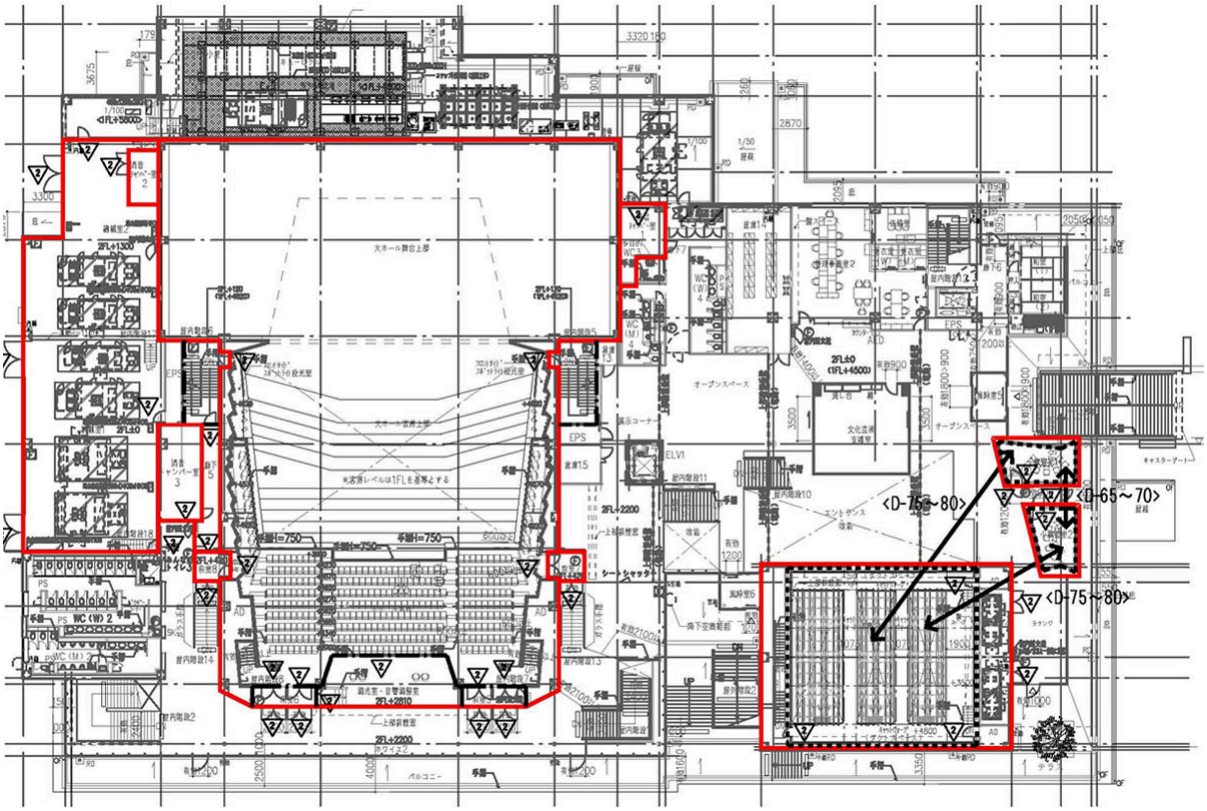
音響計画

本施設は1,200席の大ホール、最大200人収容の平土間の多目的ホール、大・小練習室、大・小会議室、文化芸術支援室などの諸室からなり、各室は開放的なエントランスホールに面するように配置されている。大ホール以外の各室のエントランスホール側はガラス面で構成された開放的な建築計画の中で、各室を有効に利用するために各室間の遮音性能の確保が重要な課題であった。

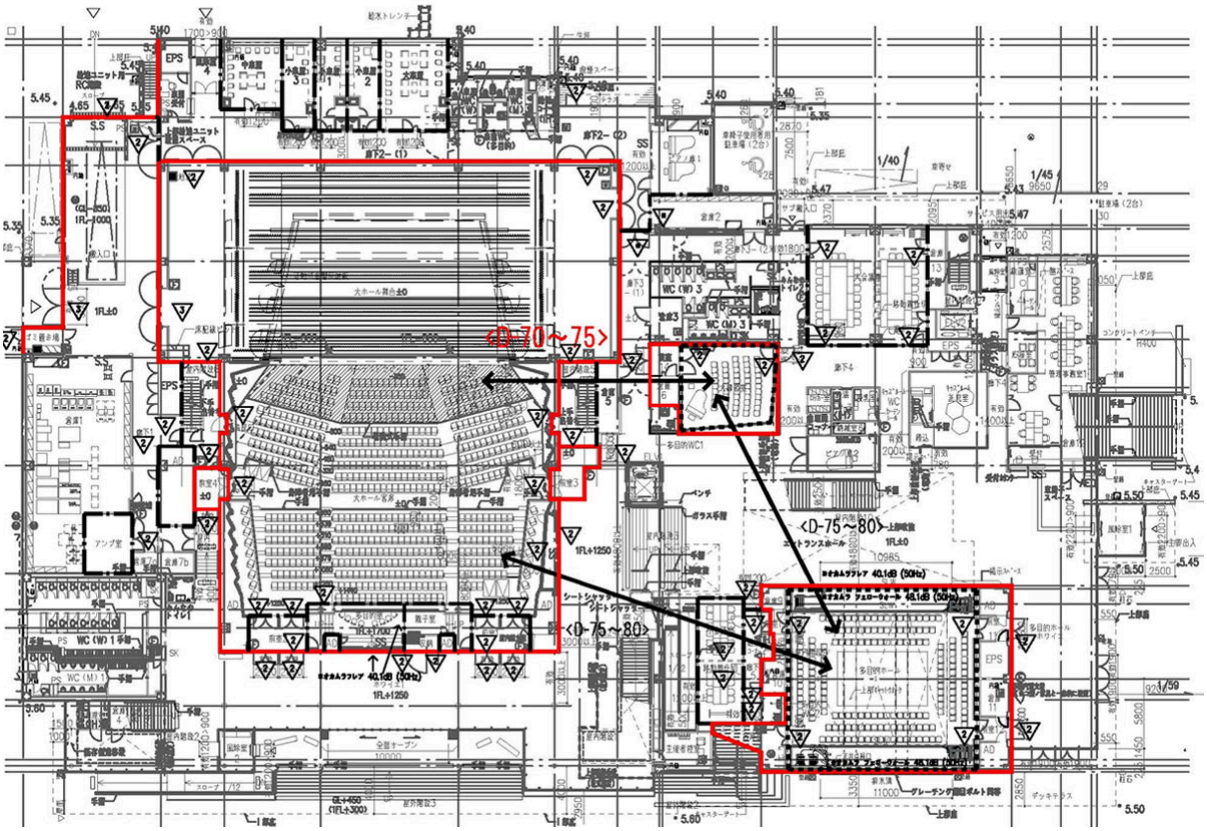
大ホールの壁を鉄骨鉄筋コンクリートで区画した上で、大音量の発生が想定される多目的ホールと大・小練習室は防振防音構造（Box in Box）とした。各室間の遮音性能は、大ホール～多目的ホール、大ホール～大・小練習室、多目的ホール～大・小練習室でいずれも85dB以上（500Hz）の遮音性能を確保し、聴感的にも音源側の音を受信側ではほぼ検知できず、ほとんどの催し物の同時利用が可能である。

大ホールの残響時間（500Hz）は舞台反射板設置時で空席時2.2秒／満席時1.8秒、舞台幕設置時では、空席時1.7秒／満席時1.5秒である。舞台反射板を設置するクラシックコンサートでは長めの豊かな響きが得られ、舞台幕設置時は響きが抑えられたクリアな拡声が得られている。

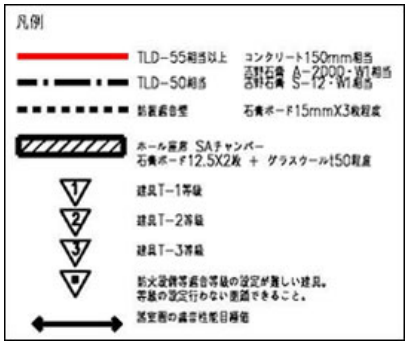
多目的ホールの残響時間（500Hz）は空席時で約1秒であり、中庸で様々な演目に適した響きが実現されている。



2階遮音区画図



1階遮音区画図



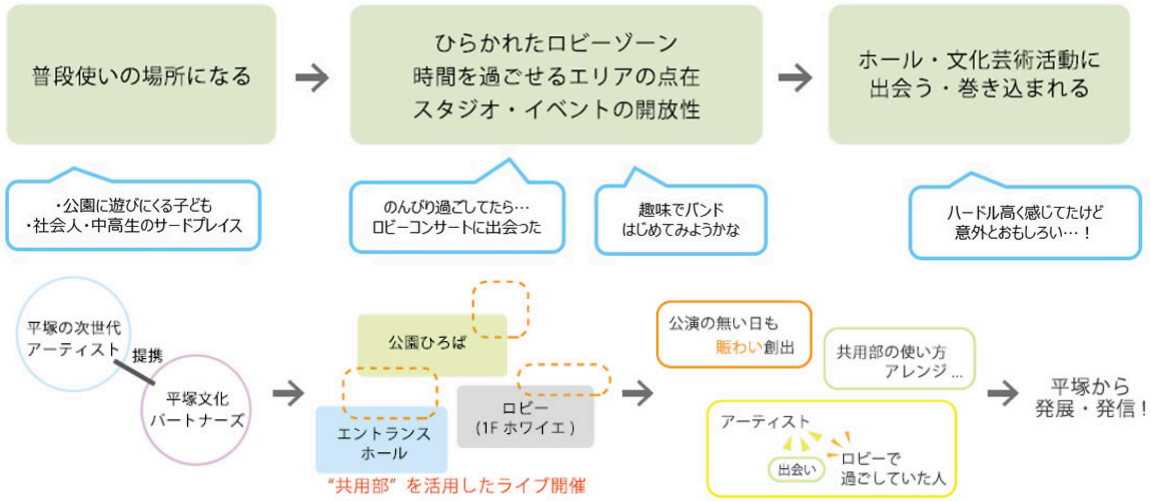
遮音区画図

03. 平塚文化芸術ホールでみられる、空間を活かした使われ方

1）地域にひらかれた居場所、普段使いの公園の中にある文化芸術拠点

前述のとおり、駅前の市街地活性化や東京・神奈川の中心から少し離れた場所に建つホールとして、より地域の方の生活に密着したにぎわい拠点になることが、このホールで大切なことである。

子どもたちから働き盛り、高齢者の方まで、広い層の方に文化芸術に触れてもらえる機会づくりと、何度も来たくなる居場所として、具体的な使われ方の一部をご紹介する。



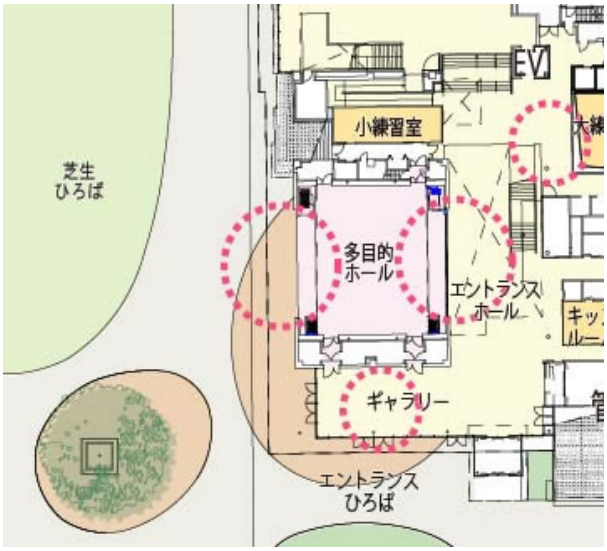
文化施設の中で起こる日常的な滞在場所と文化芸術の出会いフロー

2）屋内のロビーとつながる

文化芸術の発表・催しがホールの中から、ロビー等の共用部に飛び出して、コンサートやパフォーマンスが見える・聞こえることを意図している。

ホール環境はやや劣ってしまうが、それ以上にアーティスト・演者の姿をより広い人の目にふれること、施設全体が一つのホール、一つの文化芸術の発信の場、ととらえての取り組みである。催し、コンサートへの参加のハードルを下げ、すそ野が広がる効果もある。

また、鑑賞スタイル、催しの雰囲気もホール公演とは違った良さがある。さまざまな場所から見る、聴けるというのは、「ホールでチケットを買って、決まった席でじっと聞く」体験とは異なり、「よりリラックスして、その人の思うままに自由に聴く・見る」「演目ごとに移動して、いろんな角度からパフォーマンスを見られる」「楽しい雰囲気」「一緒に楽しむ一体感」といった鑑賞スタイルもより自由度が高くなる、といったプラスポイントと感じている。アーティスト・演者とお客さんとの距離間がより近くなることも特徴である。



屋内のロビー～多目的ホール～公園に広がるパフォーマンス

毎月のオープンライブ

あえて大ホールの専門的空間を飛び出して、一般利用者の方からも見える場所（多目的ホールを開いた状態、大ホールホワイエ）を拠点に地元アーティストのライブ公演が毎月行われている。ふらっと入れることで催しへの参加のハードルを下げ、アーティスト、活動団体の認知度アップを期待しての取り組みである。

また、必ずしも鑑賞目的専用の場所ではないフリースペースの利用者にも音楽が聞こえパフォーマンスに興味関心をもってもらうきっかけに繋がることを期待している。



多目的ホールのコンサートを
ロビーから見る様子

大ホールホワイエでの演奏会

芝生広場が演者の背景となる空間的な広がりがあるのびやかさ、タイル張りの床の環境で館内に響く環境等が、大ホール内部で演奏する状況とは違った雰囲気をつくり、鑑賞者側としても個人的に初めて体験する演目についても親しみ感が持てる効果等がある。

同様に多目的ホールにおいても、内側の2重遮音壁は開いて、外側のガラスのパーティションのみとして、ホール内での練習活動や、本番のパフォーマンスをエントランスホール側に見える形で使っている。



公園・室内からも見えるのびやかな
大ホールホワイエコンサート



多目的ホールの催しをロビーに開く様子

3）外とつながる　公園・芝生広場と連続するホール

幅広い利用を促す多目的ホール

ミニチュアSL乗車イベント、野外工作ワークショップ等は、芝生と連続することで、内部空間に閉じこもるのではなく、外部の公園までもシームレスに延長した広いマルチスペースとしての活用例である。

多目的ホールは健康体操、ヨガ、サッカーのワークショップ等、文化芸術にとどまらず、身体を動かす運動にも利用され、外部が臨め、外部とつながる空間の特性を活かされている。



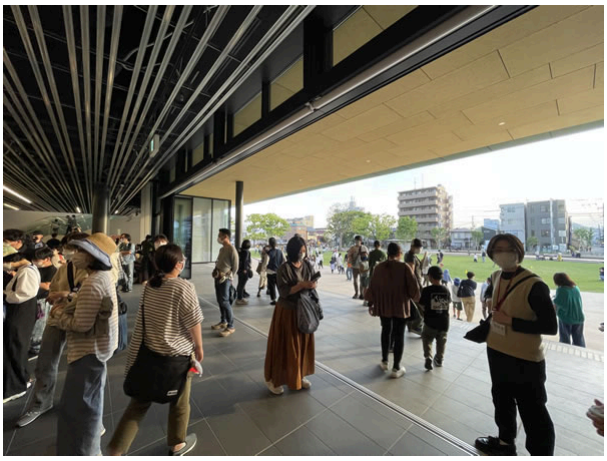
仮設のミニSLが公園～多目的ホールへ続く様子

公園とつながる大ホールホワイエの幅広いスペース

公園に面して連続した開く開口部を設けた。大ホール1階客席の勾配を緩く抑え、ホワイエの床レベルを公園と近づけ、連続感のあるスペースとした。

・大ホールイベント前後　：ホワイエを半屋外的に伸びやかに活用。公園に遊びに来た人にもイベントに興味を持ってもらうきっかけになるとよいと考えている。

・館内＋公園の一体イベント時　：ホワイエ・階段ステップをステージに見立て、公園側から観覧スペースを設けることも想定している。



大ホールホワイエ前の大開口と
公園をひらく様子

芝生のワークスペース

外の広い芝生広場で、竹細工の加工・オブジェ、流し素麺のカラフルボール版を広場一杯に自由に広げ、つなげていったもの。ホールに入ったことがない親子連れにも来てもらえるきっかけが生まれている。



芝生広場での工作WSの様子

ホール内部から公園にも飛び火したステージ

公園内には小上がりのデッキスペースがステージにもなる設計としている。観客は芝生広場から見るスタイルである。和太鼓イベントでは、大きな太鼓が外部で打ち鳴らされる状況は、内部の空間とは違ったお祭り感をつくり出している。

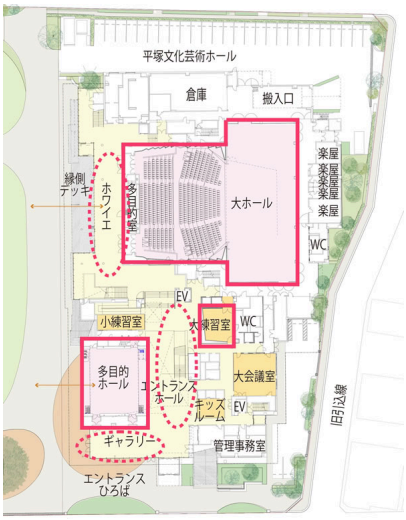


弧を描いたデッキステージを
芝生の観客席の様子

4）建物全体をつかった全館イベント　～湘南バレエ・コンペティションの事例～

中学1年生～25歳を対象にしたコンテンポラリー部門とクラシック部門において、年齢に応じた複数の部門のコンペティションが初秋に3日連続で行われている。その時は本施設のほぼ全スペース・部屋を活用した全館イベントとなっている。

・コンペティション本会場：大ホール
・リハーサル会場　　：多目的ホール、大練習室
・ワークショップ会場　　：大ホール、多目的ホール、大練習室
・表彰式　　：大ホール舞台
・審査員とのトークセッション：大ホールホワイエ
・審査員からのアドバイス会場：大練習室
・衣装ギャラリー　　：エントランス前ギャラリー（多目的ホールホワイエ）
・マルシェ・ショップ　　：1Fロビー、多目的ホール前
・身体ケア　　：2F文化芸術支援室



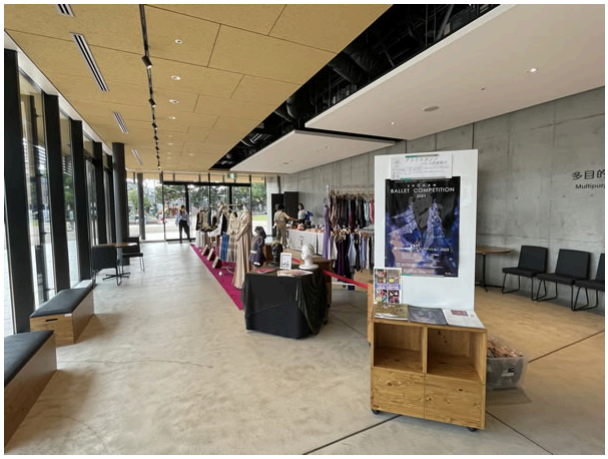
全館イベント利用時の各イベント配置の例



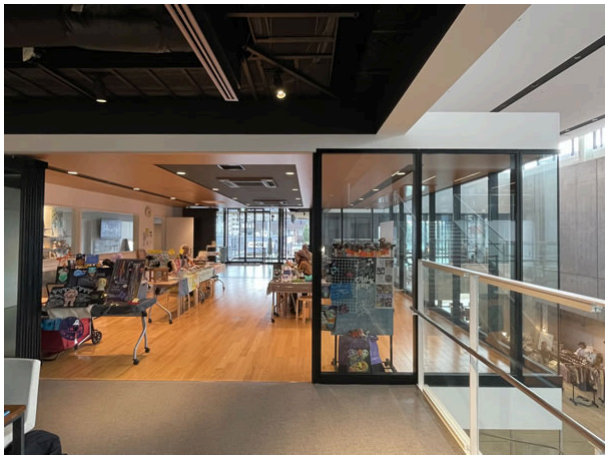
大ホール：コンペティション本番



多目的ホール前のロビー：手作りマルシェ・ショップ



ギャラリー：バレエ衣装のディスプレイ展示



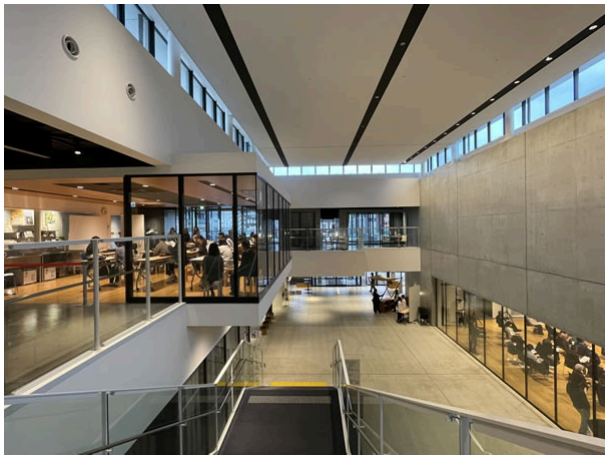
文化芸術支援室(2F)：マルシェ・ショップ

5）見えること、そこで活動する“人”が見えることの効果

建築のプラン構成ポイントは、“地域の居場所となる文化施設”となっている。広めのオープンスペースと施設内の路地との組み合わせによる空間のメリハリと活動に応じた空間の選択が可能となっている。（各スペースの詳細は第2章オープンスペース・情報コーナーも参照ください）

- エントランスホールとそこの吹抜に活動室が顔を出している構成
- オープンスペースと路地を織り交ぜた施設内を散策できるウォーカブルな共用部
- 路地に面した展示コーナー

見附台地区の商業施設への買い物後の立ち寄りや、公園に遊びに来たその延長に開かれた文化施設があることで、文化芸術活動の催しや地域イベント、そこで活動する人との出会いが日常的に生まれることを期待する。



エントランスホールを介して活動室・
オープンスペースが一同に介す様子



多目的ホールのイベント団体の活動が
周知効果にもつながる



大ホールの客席(上手)一部から中がのぞける様子



大練習室越し練習・活動する人が見える

最後に

本事業はホール＆パークの魅力を最大化し、様々な世代が日常的に自由に利用でき、いつもどこかで何かが起こっている、賑わいが絶えない施設を目指した。また、単なる箱物を作るのではなく、市内外の様々な文化団体・学術団体・商業団体とのネットワークの構築や、一般市民が運営に参画できる仕組みづくりにより、市民自身がまちづくりに参画するできることのできる拠点となることを目指した。本施設がまちづくりの拠点となり、市民に愛される施設に育っていくことを願っている。



地域ネットワークによるイベント開催風景

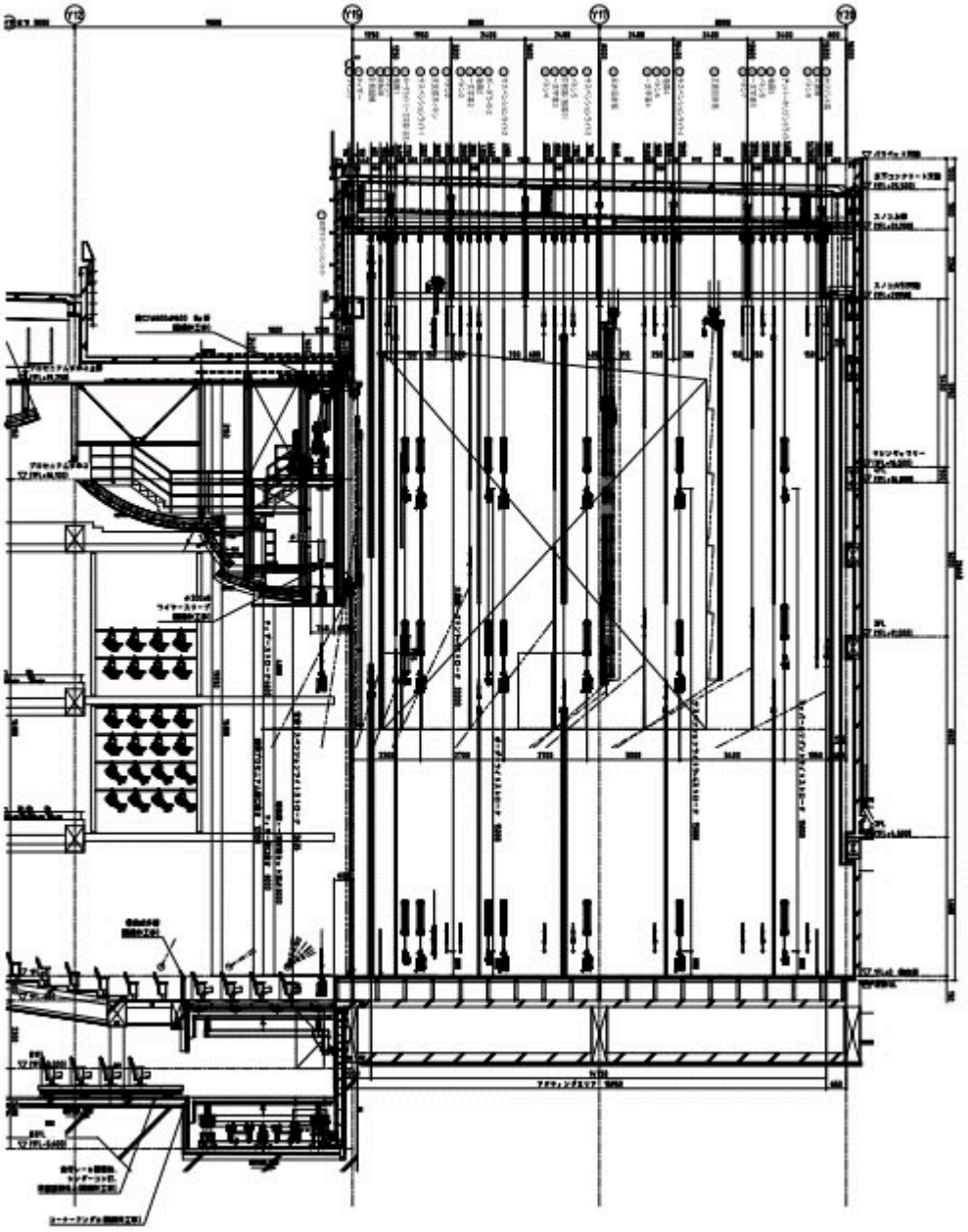
ひらしん平塚文化芸術ホールの舞台機構設備

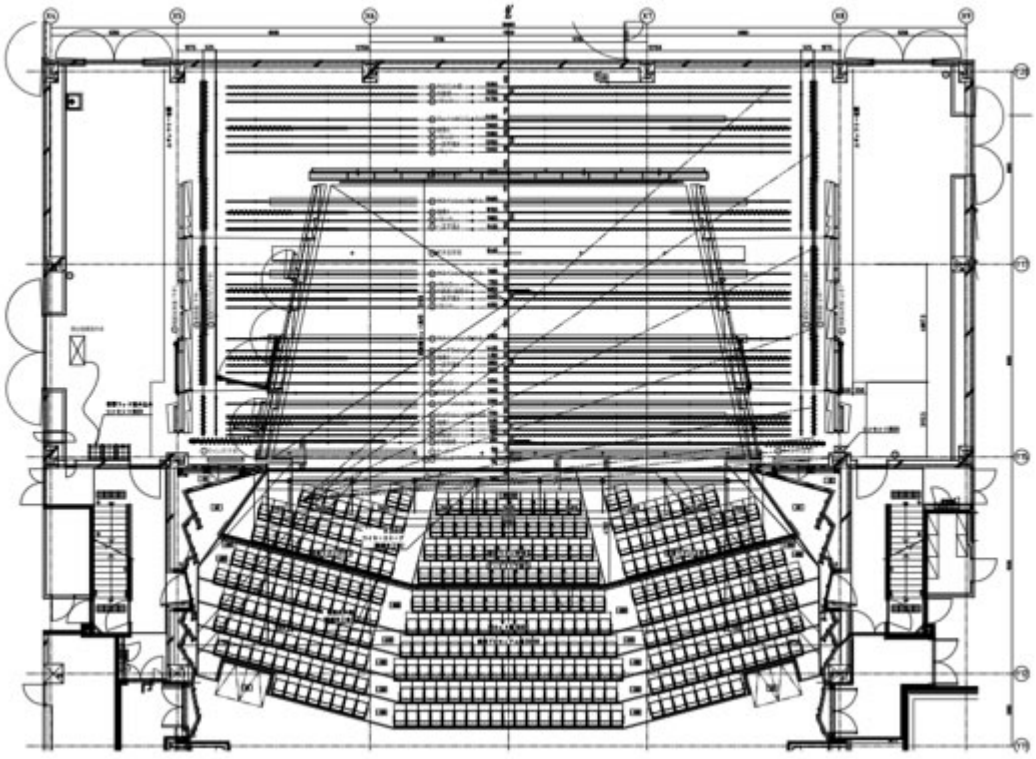
三精テクノロジーズ株式会社
舞台機構事業本部　設計部　和田美香
制御設計本部　第一設計部　三上大介

1 機構概要

大ホールには、吊物バトンのほか、音響反射板、オーケストラ迫り、客席ワゴン、プロセニアム開口可変装置などを備えたプロセニアム形式のホールです。以下に主な装置一覧を記載いたします。

■大ホール			
プロセニアム可変装置		音響反射板	
ティザー	1台	天反前吊バトン	1台
ウィング（手動開閉）	1対	天井反射板	1台
引割緞帳（電動開閉）	1台	側面反射板	1対
吊物バトン		正面反射板	1台
道具用	9台	看板用バトン（手動）	1台
幕バトン		床機構	
暗転幕	1台	オーケストラ迫り	1台
袖幕(袖幕3中割幕兼用)	5台	客席ワゴン　中央・上手・下手	各1台
一文字幕	4台		
大黒幕	1台		
ホリゾント幕	1台		
照明バトン			
サスペンションライト	4台		
ボーダーライト(内1台一文字幕共吊)	2台		
アッパーホリゾントライト	1台		
東西ライトバトン	2台		
客席サスペンションライト	1台		
その他			
東西幕（ダブルレール）	1対		

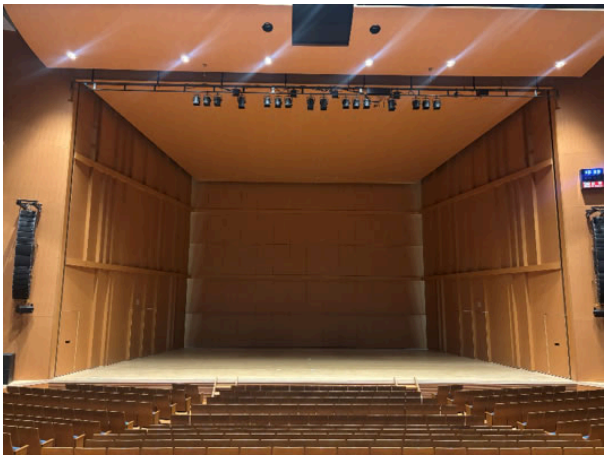




2.大ホール

1）音響反射板

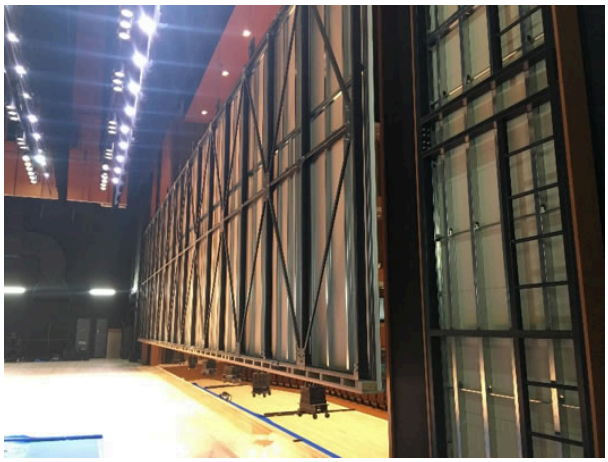
大ホールの音響反射板は、天井、側面、正面を分割し、ぶどう棚より吊り下げる従来通りの方式を採用しています。設置時には間口幅20m、間口高さ12m、奥行き12mを確保できます。側面反射板には客席、中央側に小扉およびピアノ扉を設置し、さまざまな公演・パターンに対応ができる出入り構造としています。仕上げ形状との一体感を損なわないように、扉サイズや設置位置を検討し、打合せを行いました。天井反射板の舞台奥側には固定バトンを設置しており、天井反射板セット中にも吊物バトンとして使用することが可能となっています。



音響反射板

2）プロセニアム可変装置

ティザー(電動昇降)およびウイング(手動開閉)を備え、プロセニアム間口18m～20m、高さ8～12mの範囲で調整可能です。ティザーの昇降装置は、マシンギャラリーやぶどう棚ではなく、客席側プロセニアムすのこに設置しています。ウイングは壁面からレール設置用ピースを取り付け、走行レールを設置、床面にガイドレールを設置することで、壁面との隙間を最小限に抑えたコンパクトな納まりを実現しています。



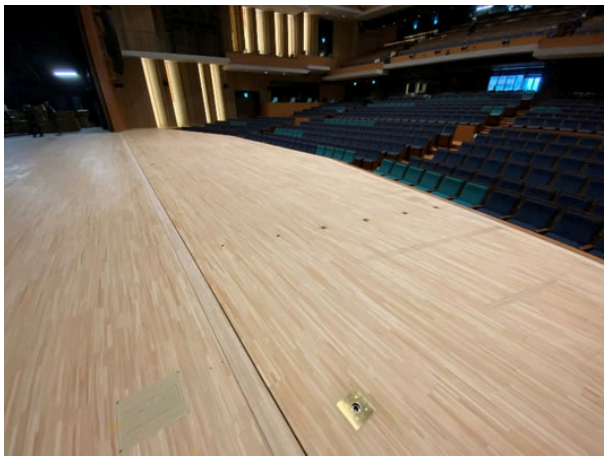
ティザー裏側



ウイング裏側、レール

3）床機構

客席にはオーケストラ迫りを設置し、床面を演奏面の高さに設定することでオーケストラ迫りとしての利用はもちろんのこと、前舞台面の高さに設定することで舞台面を拡張した利用も可能です。また、オーケストラ迫りに３分割の客席ワゴンを乗せることで客席としても利用できます。客席下にはワゴン庫を設け、ワゴン格納用レールは床面とフラットに仕上げており、歩行性に優れた構造となっています。



前舞台仕様



.ワゴン庫

4）バトン類

舞台上の吊物機構は全て電動昇降式です。引割緞帳・暗転幕・道具バトン・大黒幕にはINVモータを採用する事で可変速を可能としており、演出の幅を広げる事ができるようになっています。

また、道具バトン・照明バトン共に、レベル設定機能、積載表示機能を有しており、再現性・安全性に配慮したものとなっています。



マシンギャラリー

5）制御及び操作卓について

舞台下手袖に移動式操作卓を採用しており、吊物機構・音響反射板・床機構を運転することができます。操作釦は9軸のグループ運転釦に加えて、演出上直ちに運転操作を行いたい引割緞帳やオーケストラ迫りには装置割付不要な専用運転釦を設けています。

操作卓に搭載されているタッチパネル式ディスプレイを使用することで、3メモリを設定できるレベル運転やグループ運転をする事が可能です。



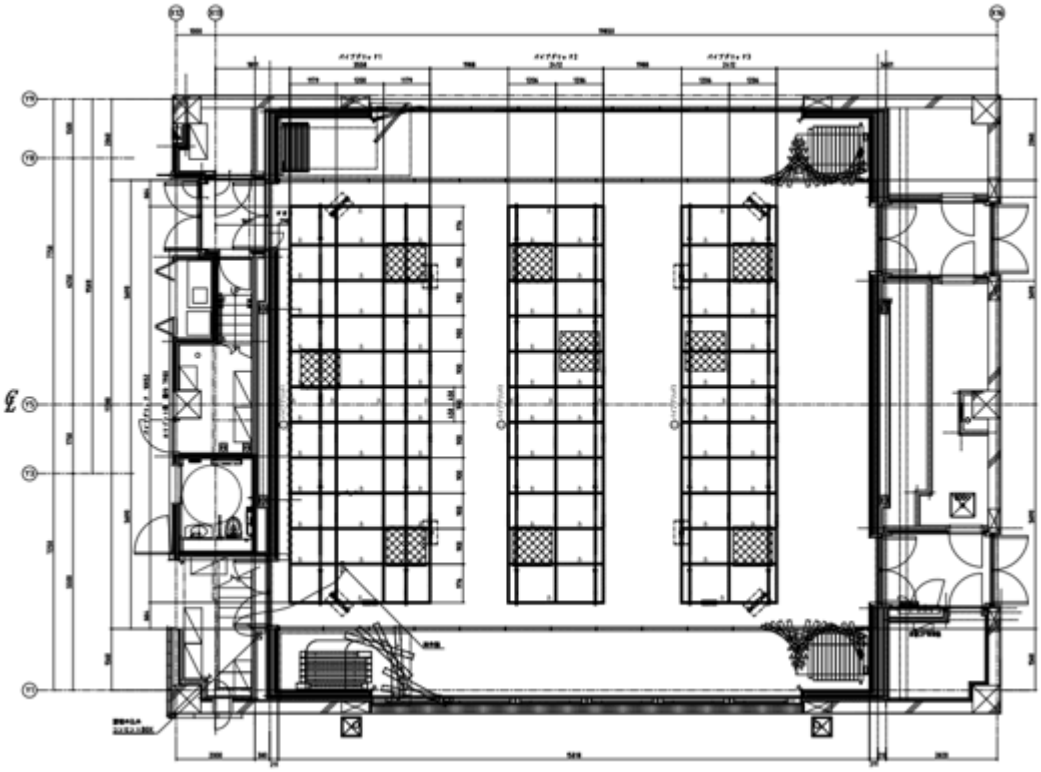
.大ホール操作卓

3.多目的ホール

平土間形状の多目的ホールにはグリッドバトン3台とホリゾント幕を備えています。音楽、演劇、ダンス、講演会、レセプションなど多目的に利用するホールに対し、グリッド状のバトンを設ける事で吊物設置個所の制約を抑え、自由にレイアウトができるようになっています。



グリッドバトン



多目的ホール断面図

おわりに

コロナ過における打合せおよび施工期間を経て、無事に竣工を迎えることができました。これもひとえに関係者の皆様のご協力の賜物です。本劇場の建設に関わっていただいたすべての方々に、心より御礼申し上げます。

平塚文化芸術ホール 舞台照明設備

丸茂電機株式会社 菅野誠義

はじめに

ひらしん平塚文化芸術ホールは、老朽化した平塚市民センターの建替えを中心とした見附台周辺地区の再整備事業として、2022年3月26日にオープンしました。

施設には3層構造で構成された1200席の客席を持つプロセニアム形式の大ホール、最大200名を収容できる平土間形式の多目的ホールがあり、当社では両ホールの舞台照明設備を施工いたしました。

大ホール

大ホールの舞台照明設備の特徴としては、プラグイン調光器による集中制御方式と移動型調光器による分散方式を幕前と幕中のエリアに分けて採用したことです。

以下、幕前と幕中のエリア分けてそれぞれの設備を解説します。

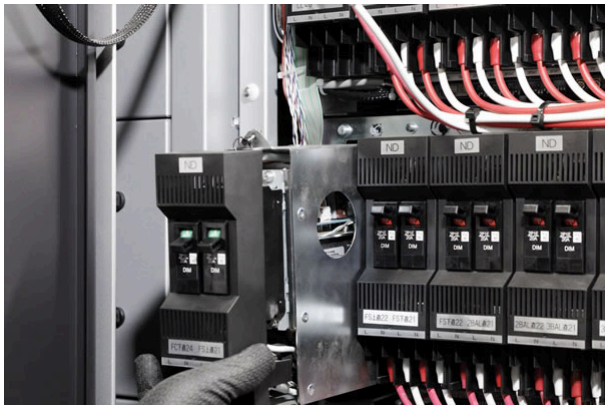


大ホール　客席

■プラグイン調光器を採用した幕前の舞台照明設備

プラグイン調光器は調光器盤から容易に取り外しが可能なユニット式になっており、将来的なLED化に伴い直回路への変更が必要となった場合や、故障時にユニット単位で交換が可能です。

シーリングライトやフロントサイドライト、バルコニーライトなど幕前の設備は、器具の吊り替えが少なく、基本仕込みの常設器具の使用が想定されるため、常設調光器盤に内蔵されたプラグイン調光器から調光回路を送っています。また、舞台床のフロアーコンセント回路についても、移動型調光器の設置スペースが限られるため、プラグイン調光器を採用しています。



調光器盤に内蔵されたプラグイン調光器



大ホール　シーリングライト

■移動型調光器を採用した幕中の舞台照明設備

一方、サスペンションライトなど幕中の設備は、公演ごとに移動器具の吊り替えが必要になると想定されるため、移動型調光器による分散方式としました。この方式では演目や演出ごとに各バトンの調光回路を増減させるなどの柔軟な回路構成が可能なほか、直回路も取れるため、LED器具にも対応できます。

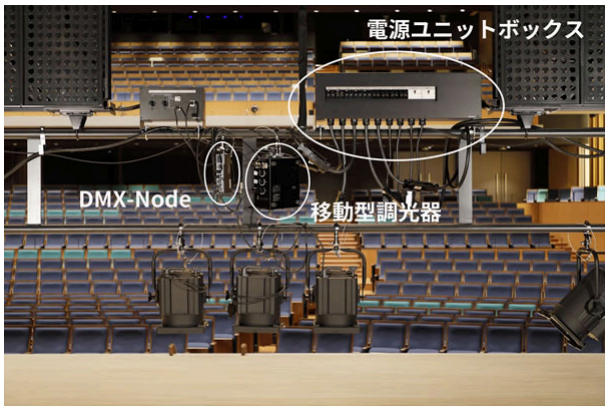
具体的には、幕中の各負荷設備に2kW×3chの移動型調光器を分散設置しました。移動型調光器の電源となる電源ユニットボックスには1φ3W電源を供給し、負荷側で直100Vと200Vを共用することで、多様な照明機材に対応しています。また、サスペンションライト用電源ユニットボックスの出力には、仕込み時の作業性を考慮してピッグテール方式を採用しました。

さらに、将来的なLED化や多チャンネル化を見据え、ホール全体にイーサネットを幹線としたネットワークを構築しています。調整室のメインネットワーク制御ラックを中心に、すのこ、機械室、客席上手、客席下手の各拠点にサブネットワーク制御ラックを設置。そこから各負荷設備へLANを配線し、負荷末端のDMX-NodeでDMXに変換することで、移動型調光器やLED器具の制御用として使用できます。

LED器具の導入については、ボーダーライト、ホリゾントライト、天井反射板ライトなどのフラッドライト系を中心に採用しています。



大ホール　サスペンションライト



電源ユニットボックスと移動型調光器

■大ホール　電源設備・調光装置

主幹電源盤	1φ3W　200KVA（幕前） 1φ3W　140kVA（幕中）
電源ユニットボックス	1φ3W電源　12kVA　20台
直回路	直15A　3回路　直20A　34回路 直60A　17回路　直200V20A　16回路
調光回路	プラグイン調光器　調光2kW×145ch プラグイン直ユニット　直2kW　×　21ch 移動型調光器　2kW×3ch　52台（156ch）
照明機器電源盤	1φ3W　60kVA　2面（舞台袖 上手/下手）
調光操作卓	丸茂電機　PRETYNA-M　据置型　プリセット80本×3段



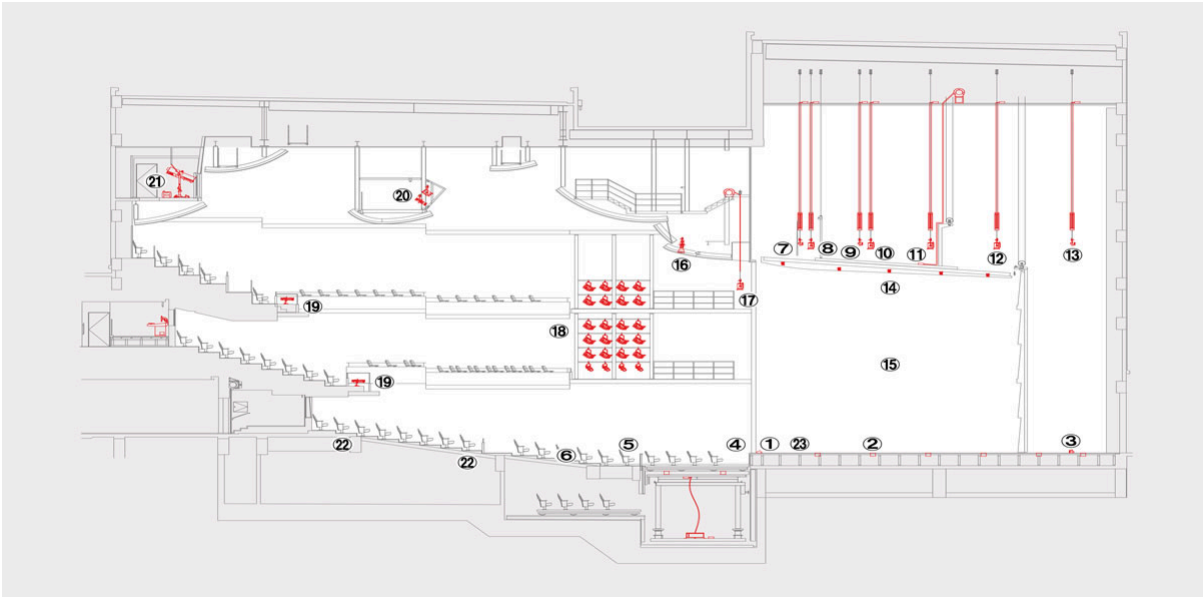
大ホール　調光操作卓

■大ホール　負荷設備

項	名　称	数 量	直回路 100V			直回路 200V	電源ユニットボックス			移動型調光器	プラグイン調光器		制御信号		
			15A	20A	60A	20A	1φ3W 12kVA	100V 60A	200V 20A	2kW	2kW	直20A	DMX IN	DMX OUT	LAN
①	フットライト	1 列									4				
②	フロアーコンセントボックス	20 個			1						37	8		8	
③	ロアーホリゾントライト（LED）	16 台										3		3	
④	仮花道フロアーコンセント	2 個									4				
⑤	鳥屋口ウォールコンセント	2 個									4				
⑥	客席ウォールコンセント	2 個									4				
⑦	第1ボーダーライト（LED）	1 列	(4)	4										2	
⑧	第1サスペンションライト	1 列	(4)	4			4	(8)	(8)	24					2
⑨	第2ボーダーライト（LED）	1 列	(4)	4										2	
⑩	第2サスペンションライト	1 列	(4)	4			4	(8)	(8)	24					2
⑪	第3サスペンションライト	1 列	(4)	4			4	(8)	(8)	24					2
⑫	第4サスペンションライト	1 列	(4)	4			4	(8)	(8)	24					2
⑬	アッパーホリゾントライト（LED）	16 台	(2)	2			2	(4)	(4)						1
⑭	天井反射板ライト（LED）	62 台		2										1	
⑮	東西ライトバトン（上手／下手）	2 式	各1		各3	各3				各6				各3	
⑯	コンダクターライト	2 個	1											2	
⑰	客席サスペンションライト	1 列	(2)	2			2	(4)	(4)	12					1
⑱	フロントサイドライト（上手／下手）	2 式			各2	各2					各20	各2			各2
⑲	バルコニーライト	2 列	各 (4)			各2					各6	各2			各2
⑳	シーリングライト	1 列			2	2					40	2			2
㉑	センターピンスポットライト　クセノン2kW	2 台			4										
㉒	持込卓用コネクタボックス	2 面	(4)	4									4		2
㉓	持込照明機器用電源盤　舞台袖【別電源】	2 面	各2	各1	各2	各4					(12) ※				各2

※ ②フロアーコンセントボックスと共通回路

■大ホール　断面図



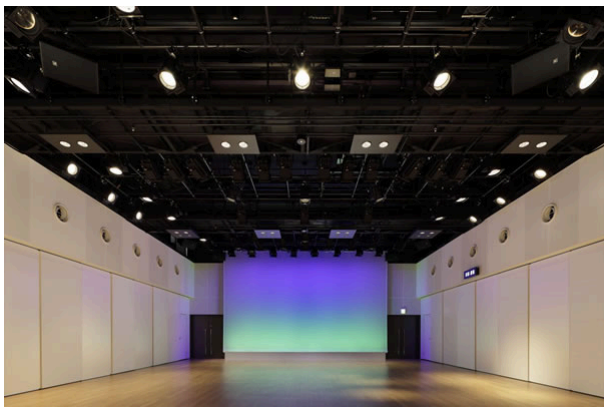
PDFデータで表示≫

多目的ホール

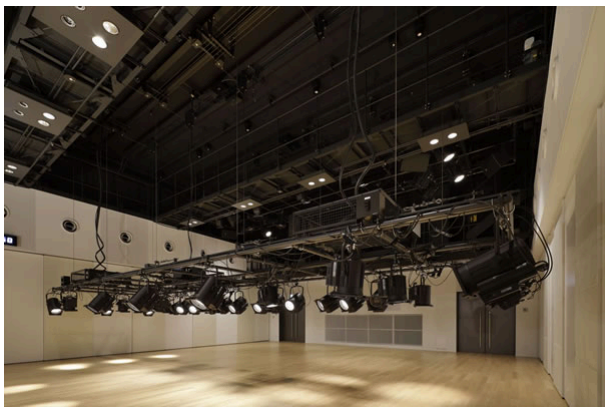
■多目的ホールの舞台照明設備

多目的ホールの舞台照明設備はスポット系も含めオールLEDで構成していますが、移動型調光器も使用できるよう大容量の直回路60Aコンセントを各所に設備し、ハロゲン器具等の持込機材にも配慮した設備になっています。ホール内の制御信号については、汎用性の高いDMXで統一しており、LED器具または移動型調光器の制御に使用できるよう各負荷に敷設しています。

また、ホール上部のトラスは3つのブロックごとに昇降が可能となっています。



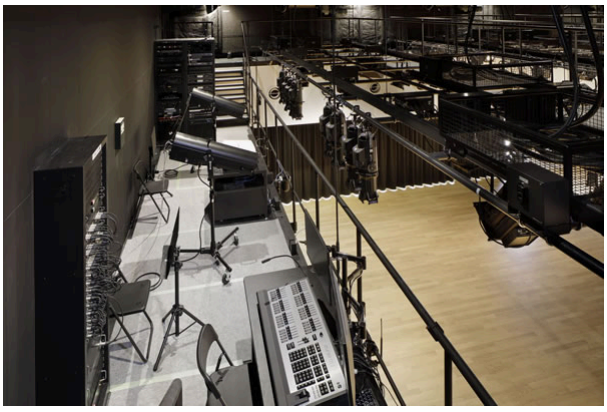
多目的ホール　LEDホリゾントライト



多目的ホール　トラス

■多目的ホール　電源設備・調光装置

主幹電源盤	1φ3W　60kVA
直回路	直20A　26回路 直60A　20回路
照明機器電源盤	1φ3W　40kVA　1面
調光操作卓	ETC　Elements2 ETC　Color　Source20

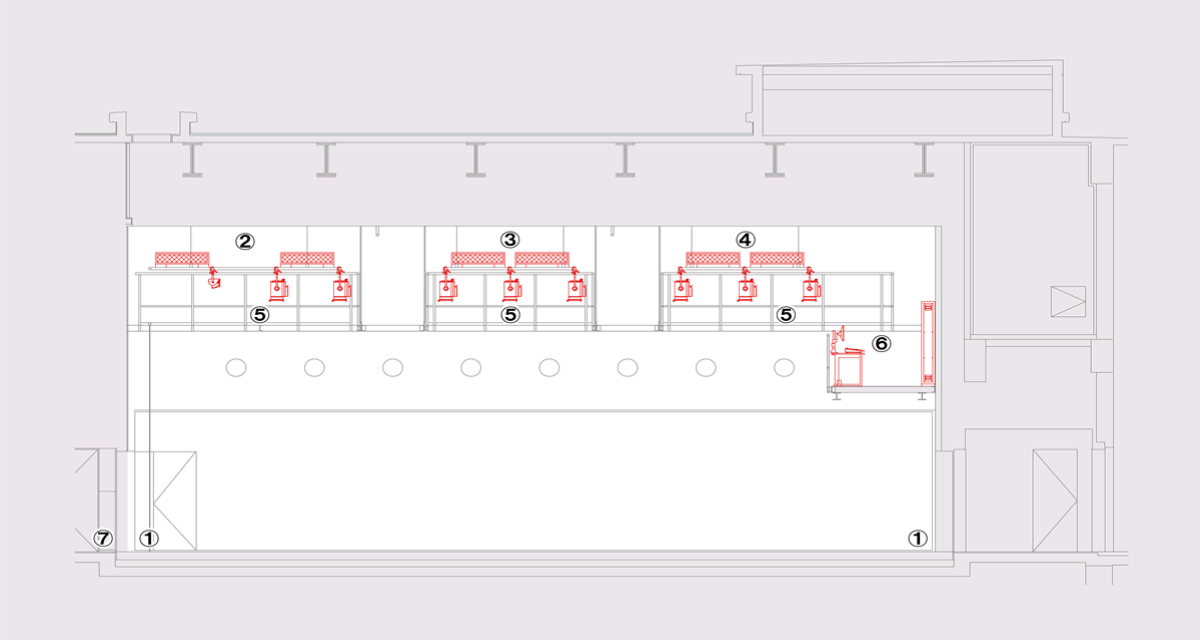


多目的ホール　ギャラリー

■多目的ホール　負荷設備

項	名　　称	数　量	直回路 100V			直回路 200V	制御信号	
			15A	20A	60A	20A	DMX IN	DMX OUT
①	ウォールコンセント（LH　9台:LED）	4 個		2	4		3	4
②	トラスバトン1（UH 9台:LED）	1 式		6	4			6
③	トラスバトン2	1 式		6	4			6
④	トラスバトン3	1 式		6	4			6
⑤	サイドギャラリー（上手/下手）	2 式		各2	各2			各4
⑥	センターピンスポットライト　（LED）	2 台		2				4
⑦	持込照明機器用電源盤　【別電源】	1 面	2	1	2	2		2

■多目的ホール　断面図



PDFデータで表示≫

おわりに

本工事の実施にあたり、関係各社の皆様には多大なるご尽力とご協力を賜り、無事に工事を完了することができました。

ここに改めて厚く御礼申し上げます。



ひらしん平塚文化芸術ホール　舞台音響映像設備

ヒビノスペーステック株式会社 システム事業本部 開発部 竹部 健太

1. はじめに

平塚市は豊かな自然に恵まれ、かつては旧東海道の宿場町として栄えた長い歴史と伝統を有する場所で、本施設は見附台周辺地区整備事業として設計・建設から運営まで民間の資金やノウハウを活用するPFI事業として整備されました。

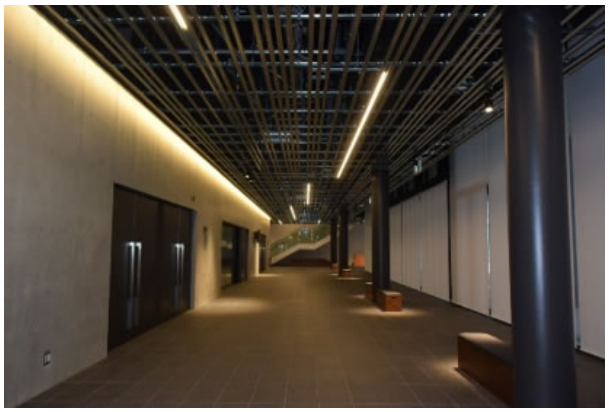
平塚文化芸術ホールは、「体験する」、「きわめる」、「交流する、賑わう」をテーマに、さまざまな文化芸術に触れる機会を作る文化芸術拠点、また、文化芸術活動をはじめとした多くの交流が生まれる賑わい拠点を目指し、2022年3月26日にオープンしました。

施設内にはクラシックやコンサート、演劇、バレエから、企業の式典や講演会に利用することができる1,200 席の固定席の大ホールや、長手方向の側壁が隣接する見附台公園側にも開放ができ、公園との一体利用が可能な最大 200 名収容の多目的ホール、また大小の練習室や会議室、和室、キッズルームなど 8 室を備えています。

ここでは、2つのホールに納入された舞台音響設備及びVoIP統合型の映像設備について解説します。



ホール外観



ホールホワイエ

2. 大ホール舞台音響設備

本ホールの大きな特徴の一つとして、ラインアレイスピーカーの露出設置が挙げられます。

これまでのホールでは、スピーカーは隠すもの、見えないものという設計上の暗黙の了解でした。

これはスピーカーが見えていることによって無意識ながらも聴覚が視覚情報に引っ張られることを避け、舞台に集中するための措置としては有効な手段ですが、位相コントロールを重視するラインアレイスピーカーに関しては、前面の障害物（サランネット）や周囲を囲われる環境は決して好ましい環境とは言えないところです。

本件では設計当初からこの問題意識を持ち、露出設置することで計画をスタートさせたのですが、見えることでの一体感ある意匠性とコストバランスも鑑みながら関係者との協議を重ね、最終的にはCODA AUDIO製N-RAYを採用することになりました。



大ホール　全景



大ホール　サイドスピーカー
CODA AUDIO製N-RAY

実はN-RAYは実施設計発行後の2020年4月に発表、5月に新発売されたばかりのニューモデルでした。

これは従来のViRAY（8インチ3WAY）とTiRAY（5インチ2WAY）の間を埋める「6.5インチ３WAYモデル」として登場し、最大音圧レベル143dB/SPLという圧倒的なパワーを有したモデルです。

当初は、様々な都合で別ブランドの製品やCODA製TiRAYも検討候補として画策していたのですが、PFIの運営会社様をはじめとした関係者協議の中で、“もう少し余裕を持って拡声が出来るモデルにしたい”というご要望があがり、満を持して登場したN-RAYをご提案させて頂き、試聴も頂いたうえで設計変更となった経緯でした。

これは設計段階から運営会社様が参画されていたことでご意見を反映することが出来たPFI事業におけるメリットの一つであったと振り返ることが出来ます。

N-RAYの配置と構成に際しては、舞台間口のサイドとセンタープロセニアムをメインスピーカーとして構成しています。

サイドスピーカーは、1階席から2階席まで広くカバーする必要性とバルコニー席先端部への余計な反射を抑制するという観点から、中間に低域拡張ラインアレイモジュールのSCN-Fを挟み、1階席狙いと2階席狙いに分けた配置、サブウーファーは18インチモデルのG18-SUBを床置きとしております。

プロセニアムスピーカーに関しては、プロセニアムアーチが天井反射板として機能する点や意匠デザイン、セリフ中心の拡声用途になることなど様々な要因を鑑みて埋め込み型として設置しましたが、天井反射板機能として反射面を多く残したい建築音響側と、音抜けを良くしたい音響設備との意向バランスを取りながら開口調整した点は苦労した点のひとつとしてご紹介させて頂きます。



プロセニアムスピーカーと開口



サイドスピーカー（下はインフィル）

操作系に関して、音響調整室の音響調整卓には高い性能と音質を誇るDiGiCo社のSD-12/96を選定しました。SD12は2017年の登場ですが、2019年9月にアップグレードされたSD12/96を採用することで96ch/48busに拡張された当時の最新モデルでの導入となりました。

伝送システムはDante/96kHz対応とすることで、システム全体に渡って高い品質を保った仕組みとしています。

パワーアンプ架内部では、Dante対応デジタルマルチプロセッサーBLU-806で処理した信号を、メイン系にはLiNETコンバーターを経由して、補助系や効果音系はBLU-LINKを経由して伝送しております。



大ホール　音響調整室 音響調整卓
DiGiCo製SD12-96



大ホール　アンプ室　パワーアンプ架

主要機器構成

品名	ブランド名	型番	備考
プロセニアムスピーカー	CODA AUDIO	N-RAY	10台×1式
サイドスピーカー	CODA AUDIO	N-RAY＋SCV-F、 G18-SUB	11/2/1×1対向
インフィルスピーカー、 固定はね返りスピーカー	CODA AUDIO	G308-L,R	L,R各1台
音響反射板内蔵スピーカー	CODA AUDIO	D5-CUBE	側反板に各1台埋込
バルコニー補助スピーカー	CODA AUDIO	G308-L,R	2台
バルコニー下補助スピーカー	JBL Professional	Control 26CT	4台
演出効果音用 ・シーリングスピーカー ・ウォールスピーカー	 JBL Professional JBL Professional	 Control 47LP Control 28-1	 2台 12台
4chDSPパワーアンプ	CODA AUDIO CROWN	LINUS14 LINUS 10-C,5-C Dci 4|300N	メイン系6台 補助系2台 効果音系4台
AES/EBU→LiNETコンバーター	CODA AUDIO	LiNET Master	2台
デジタルマルチプロセッサー	BSS AUDIO	BLU-806,160,120	96kHz伝送、合計6台
デジタルミキシングコンソール	DiGiCo	SD12-96	96kHz伝送
舞台袖簡易操作卓	DiGiCo	SD11i	96kHz伝送

※一部のスピーカーは竣工後の改修工事で組み替えております。

3. 多目的ホール舞台音響設備

多目的ホールは、その名の通り、音楽、演劇、ダンス、講演会、レセプション等、多目的用途なホールです。

スピーカーシステムは豊富なラインナップを誇るJBL Professionalの設備用モデルから指向性の異なるAC266、AC299を選定し、昇降式のグリッドバトンに対して平土間利用かエンドステージ利用かによって吊り替えが可能なバトンクランプ式の取付方法を用いています。



多目的ホール　全景



吊替え可能なスピーカー
JBL Professional AC266、AC299



昇降式グリッドバトンに対して
組み替え可能なスピーカーパッチ盤

操作系については、運営会社様から「仕込みをしたら部屋貸しする運用としたいので、詳しくない方でも簡単に操作できる仕組みしてほしい、イベント時は技術ギャラリーに機材を持ち込んでオペが出来る様にしてほしい」とのご要望を頂いたことから、AMXを用いた制御システムで利用ニーズに合わせた運用パターンを選択できる操作パネルと、操作系はDiGiCo社のデジタルプロセッシングエンジン4REA4を中核に、場内の操作ワゴンでフェーダー操作できるリモートコントローラーによる簡単操作で構成しました。

4REA4と繋がるI/O回線は大ホールと共通のOPTCORE光回線のため、イベント時には大ホール用舞台袖簡易操作卓であるSD11iと移動型I/Oラックを接続することで技術ギャラリーでの拡張オペを可能とする仕組みとしております。



リモートコントローラーを
配した操作ワゴン



AMX制御による操作パネル
主電源スイッチ/
運用パターンスイッチ



多目的ホール　技術ギャラリー

主要機器構成

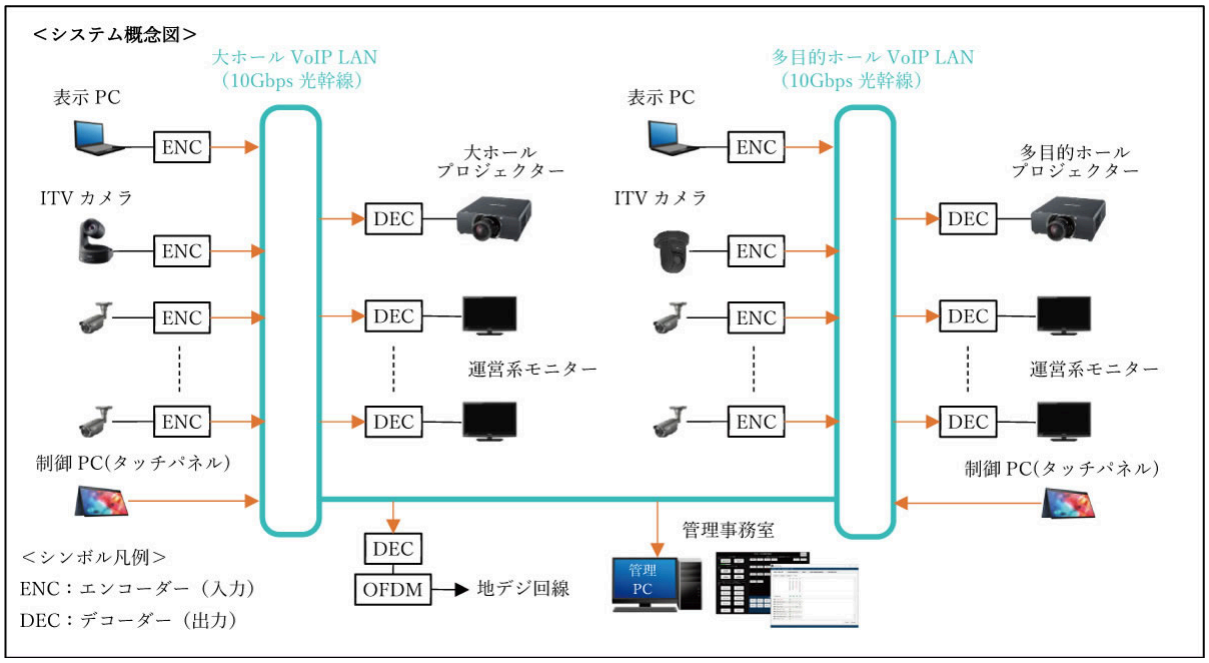
品名	ブランド名	型番	備考
メイン/シーリングスピーカー	JBL Professional	AC266、AC299	各4台、計8台
4chDSPパワーアンプ	CROWN	Dci 4|600N、300N	計5台
デジタルプロセッシングエンジン＋ I/O拡張ユニット	DiGiCo DiGiCo	4REA4 A168 STAGE	入出力制御・パワーアンプ架
8chリモートコントローラー	DiGiCo	A CONTROL8	操作ワゴン内
制御システム、操作パネル	AMX	NX-2200＋特型	

４．大ホール・多目的ホール　VoIP統合型映像設備

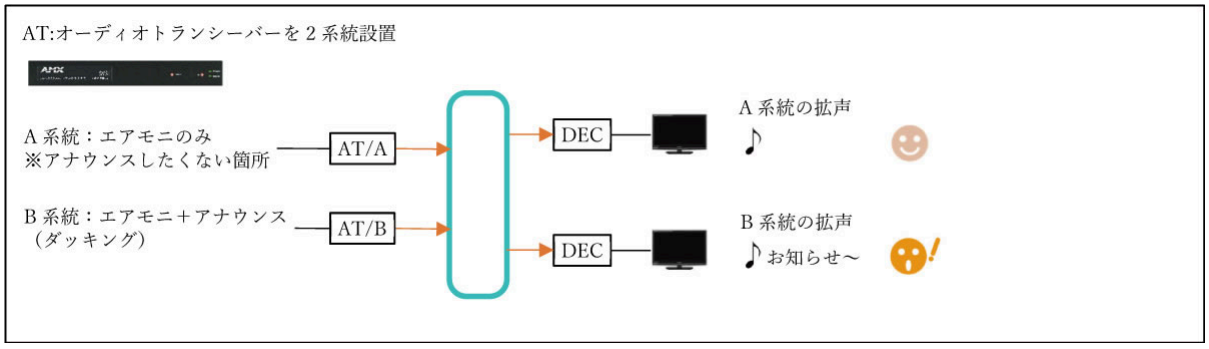
当時、出始めたばかりのVoIP（Video over IP）方式をいち早く導入しました。

これはIP伝送ながら低遅延高画質で、IPネットワーク上で入出力が自由にスイッチングできる非常に自由度が高い伝送システムで、まだまだ新技術の状況でしたが、弊社では既に導入実績があり、得られる自由度にも高い評価を得ていたことから仕様化に至った経緯です。

更に、大ホールと多目的ホール間および楽屋系や事務室とも統合ネットワークで結ぶことで相互の映像連携が容易に出来る様になり、ライブビューイングやリハーサル室としての活用、楽屋の兼用など、柔軟かつ簡単に運用することが出来る仕組みとなりました。



本システムの柔軟性を活かして、楽屋系への音声送りもアナウンスありとなしを選択できる仕組みを考え、きめ細やかな楽屋アナウンスを可能としました。




ITVカメラ


プロジェクター


大ホール舞台下手袖ITV架

主要機器構成



5. 大ホール・多目的ホール　相互音声連携

映像の相互IP伝送化に伴い、音声信号もデジタル信号のまま相互連携できる仕組みとして、Auvitran製オーディオツールボックスを用いたDanteブリッジの仕組みも取り入れました。

これによりDanteデジタル信号（96kHz）は通しながらも相互のクロック信号は分離させることで、お互いのホールシステムをマスタークロックとして運用できるものとしました。

6. 諸室音響設備：大会議室、大練習室、小練習室 他

ホールに付随する関連諸室にも音響システムを備え、利用者自身が操作することのできる簡単操作の仕組みを導入しています。



大会議室の様子



大練習室の様子



小練習室の様子

7. おわりに

本ホールの音響映像設備では、新しい取り組みにもご理解を頂き、様々な工夫を凝らした導入が出来たと感じております。これもひとえにご協力とご尽力を頂きました関係各社様のお陰です。

この場をお借りして全てのご関係の皆様に厚く御礼申し上げます。